

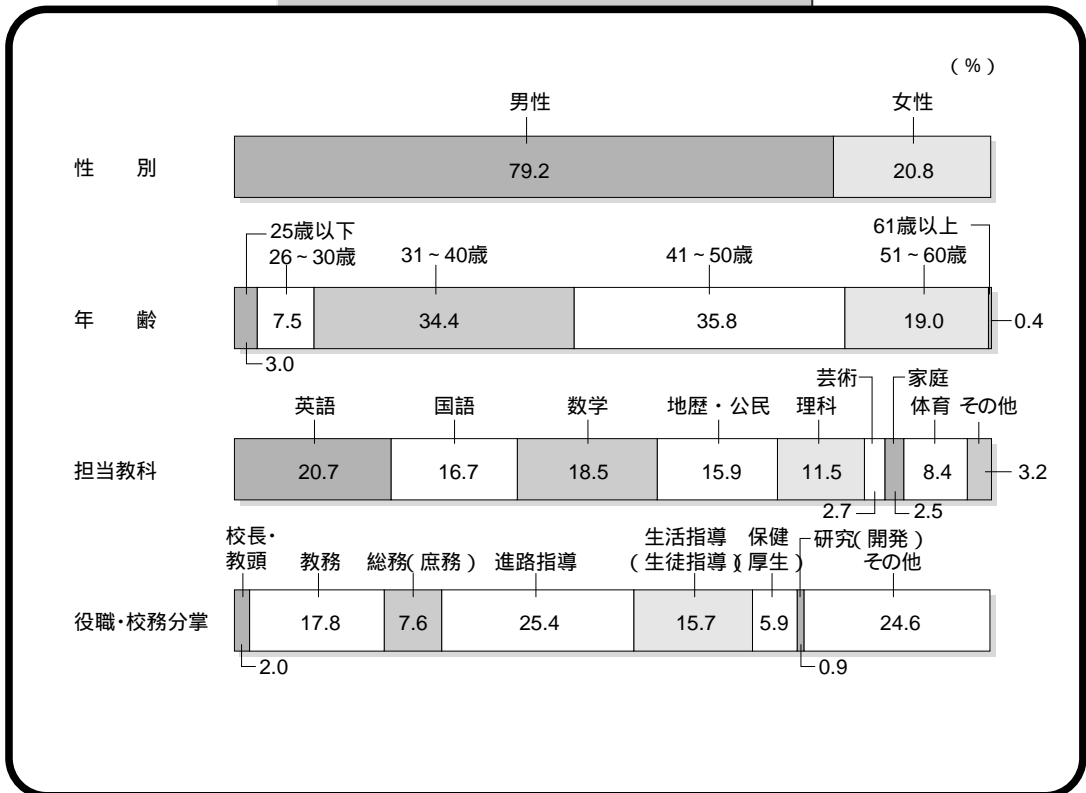
教育改革期の高校教師

教育改革が進んでいる。第二次世界大戦後、633制や男女共学が実施されて以来、半世紀にわたって堅持されていた教育のシステムが揺れ動き、教育現場は混乱状況下にある。特に、今回の教育改革が短期間に多方面から試みられ、しかも、教育現場の声を聞くことなく進められた感じがする。それだけに、改革に反対というわけではないが、当惑している教師が多いのではないかと。教師のそうした意識を探るため、教師を対象とした調査を試みた。

調査概要

全国の高校から111校を抽出し、77校の協力を得た。1校20名に調査票を配布し、774名の回答を得た。回収率は34.9%である。
2002年2月～3月に調査実施。

サンプルの構成



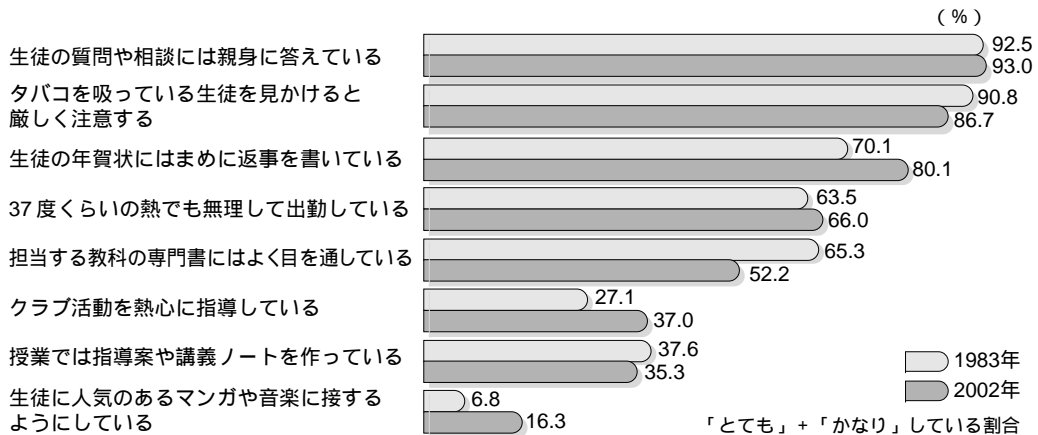
TOPIC 1

教師として心がけていること

～生徒との接触～

(⇒p.14)

日頃していること（1983年との比較）



調査では1983年に高校教師に実施したのと同じ項目を使って、教師がしていることの比較を試みた。結果は図の通りで、1983年調査と比べ、「生徒の年賀状にはまめに返事を書いている」が10.0ポイント（70.1%から80.1%へ）、「クラブ活動を熱心に指導している」が9.9ポイント（27.1%から37.0%へ）増加している。およそ20年の間に、生徒の面倒を見る教師が増加しているのがわかる。

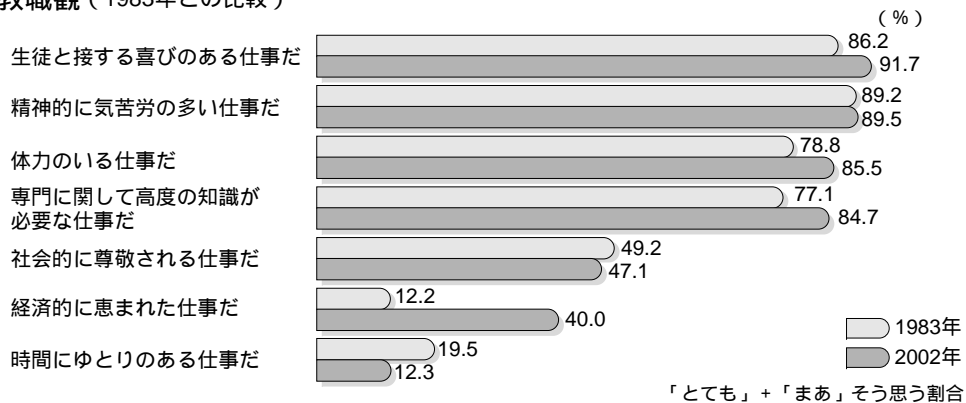
TOPIC 2

職業としての教師

(⇒p.21)

～専門的な知識が必要で、体力のいる仕事～

教職観（1983年との比較）



1983年調査と比較して、高校教師の仕事に専門的な知識が必要な仕事という認識が広まっている。併せて、時間に追われる忙しい仕事という感覚も強まっている。

TOPIC 3

日常生活での気分 ～全体に疲れている～

(⇒p.23)

日常生活での気分

	(%)		
	いつも+ときどき感じる	あまり感じない	まったく感じない
放課後になると気分がはればれとする	39.4	37.7	22.8
朝なかなか起きられない	36.6	42.2	21.1
職員会議などで発言したくても、自由に言えない雰囲気がある	33.3	41.4	25.4
できれば学校を休みたいと思う	30.2	39.8	30.1
出勤時刻になると気が重くなる	22.3	44.6	33.2
授業を途中で投げ出したくなる	6.4	26.9	66.7
職員室に近づかないようにしている	4.9	23.9	71.2

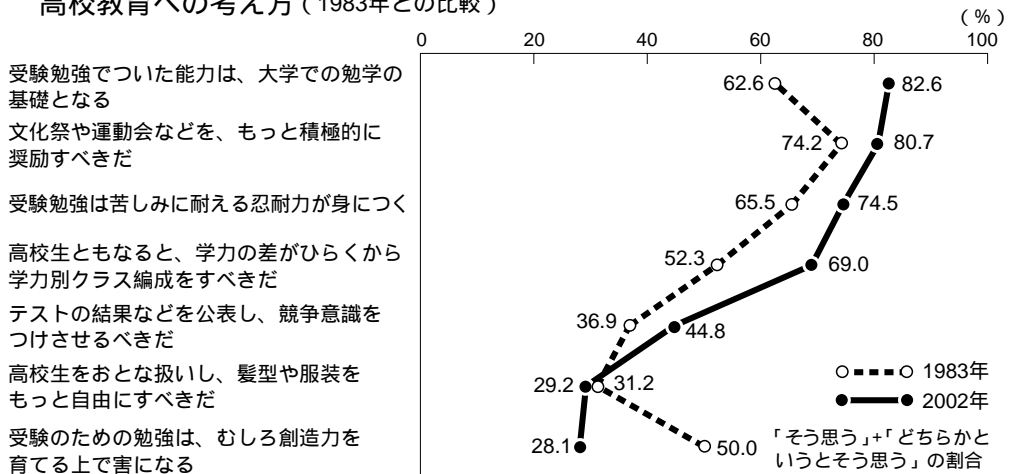
日常生活での気分は図の通りで、「朝なかなか起きられない」や「できれば学校を休みたいと思う」などを感じる教師が3割を超える。「出勤時刻になると気が重くなる」も22.3%に達する。多くの教師が教師としての生活に疲れている印象を受ける。

TOPIC 4

高校教育への考え方

～大学受験へのこだわり～ (⇒p.29)

高校教育への考え方(1983年との比較)



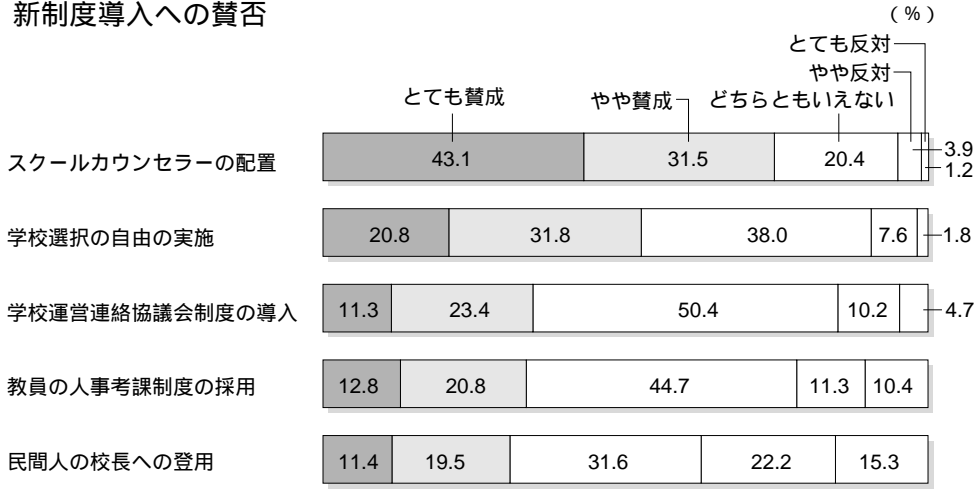
少子化の影響を受けて、大学受験が揺れ動いている。一部の大学を除くと、選抜試験が機能していない印象を受ける。しかし、図に示すように、「受験勉強でついた能力は、大学での勉学の基礎となる」や「受験勉強は苦しみに耐える忍耐力が身につく」など、受験勉強を肯定する態度が、1983年調査より2002年調査の方が強まっている。

TOPIC 5

学校改革への評価 ～ 賛成者は3割程度～

(⇒p.30)

新制度導入への賛否



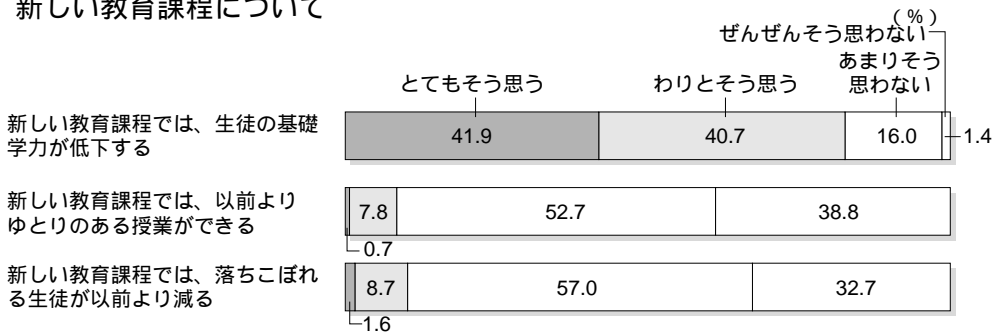
教育改革に対する評価を図に示した。「スクールカウンセラーの配置」を除くと、「学校運営連絡協議会制度の導入」や「民間人の校長への登用」に賛成しているのは3割程度である。

TOPIC 6

新教育課程についての評価 ～ 学力低下が心配～

(⇒p.38)

新しい教育課程について



新教育課程についての教師の評価は図に掲げた通りで、82.6%（「とても+わりとそう思う」と8割以上の教師が生徒の学力低下を心配している。しかし、学校5日制の導入によって、学習内容が減っても、授業時間が減りゆとりがなくなり、全体的に学力が低下し、落ちこぼれの生徒が減ることはないだろうというのが、教師の見方である。

TOPIC

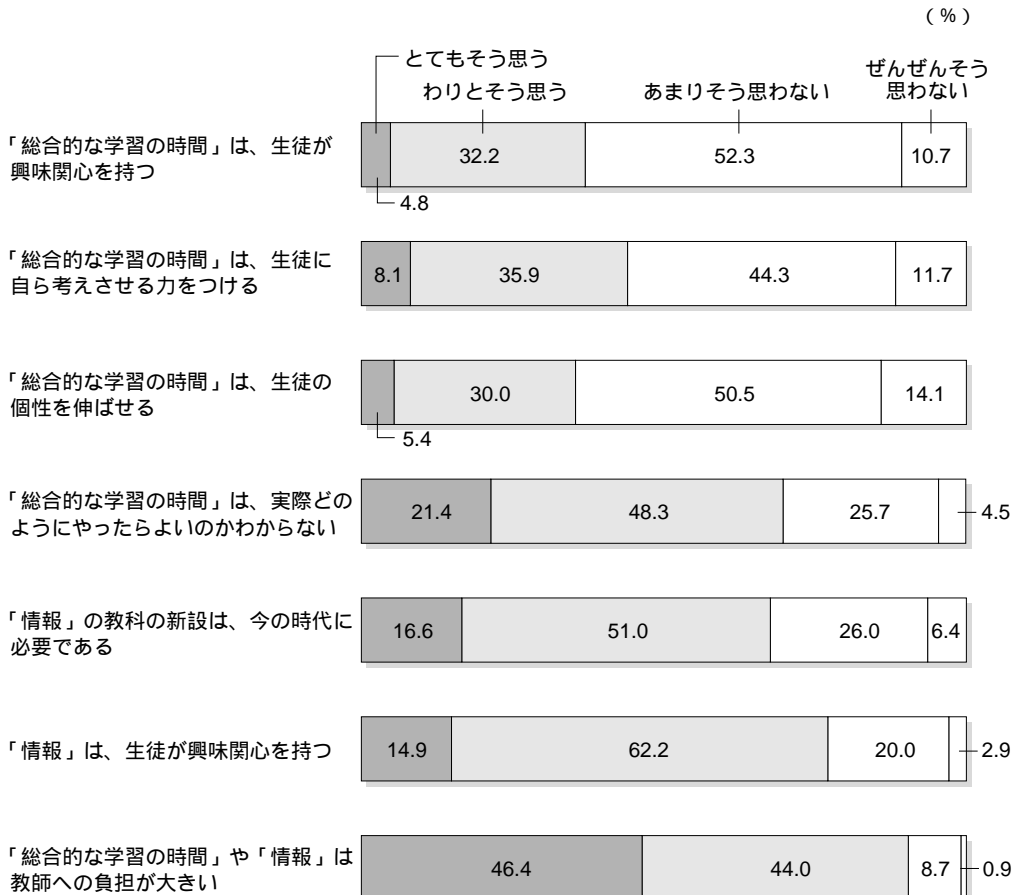
7

「総合的な学習の時間」への評価

～「情報」は必要だが、「総合的な学習の時間」は不要～

(⇒p.39)

「総合的な学習の時間」「情報」という新しい教科について



「総合的な学習の時間」に対する評価は図に示すように、生徒は関心を持たないだろうし、考える力も育たない、生徒の個性も伸びないとみている教師が多い。「情報」の新設は意味があると思うが、「総合的な学習の時間」に対して否定的な態度をとる教師が6割を超える。

まとめ

高校教師の「教師」としての目的

教育改革の嵐が吹き荒れている。文部科学省の政策に納得できるものが多いが、正直に言って、多様な改革を同時に短期間に行いすぎている印象を受ける。

今回の調査では、多くの面で、改革には積極的ではない態度が目についた。これは文部科学省が教育の地方分権化を進めると同時に、学校、特に教師の自主性をも尊重する姿勢が欠けていることが、教師の態度に影響しているようにも思える。

また、長い間、進学と就職は高校教育が社会の中で果たしてきた機能だった。しかし、この2つの機能が揺らいでいる。それだけに、高校教師は教師としての目的を失いかけているのではないか。

やや長期的な見通しの中では、進学とか就職とかというより、自分探しの場として高校は位置づくのではないか。そうしたとき、教師として何ができるのか。そうした観点で教師の仕事を考えてほしいと思った。



第1章

調査の意図と調査対象の属性

穂坂 明德

1. 調査の意図

21世紀への時代の移行とともに、新しい時代に即した教育の内容面、行政・制度面の大きな改革が進められてきた。そもそも今日の教育改革の背景とその始動は、1984（昭和59）年に設置された臨時教育審議会にさかのぼる。わが国の学校教育は、戦後教育体制の成長・発展の過程で肥大化し、硬直し、60年代末以降に「落ちこぼれ」「校内暴力、体罰、いじめ」、さらには「不登校」といった問題を相次いで噴出させた。こうした問題の連鎖ともいえる状況は、教育問題を「社会問題」へと深刻化させた。臨教審の最終答申（1987）は、画一主義からの脱却、個性重視の原則、生涯学習体系への移行、国際化・情報化への対応という教育改革の視点を打ち出している。以後、この線に沿った改革が矢継ぎ早に実施され、2度にわたる学習指導要領の改訂を経て今日に至っているわけである。

教育改革を実効あるものに仕上げるには、なによりもその最先端で教育を担う教師自身にかかっているといっても過言ではない。では、教師はこうした一連の教育改革に対し、また要請される新しい教育指導のあり方や教師自身の資質の向上に対し、どのように受け止め評価をしているのであろうか。とかく上からの一方的な改革になりがちで、教育現場の実態は改革の意図や目的に対応しきれないのでは、といった危惧の念もささやかれている。

進行する教育改革の中で、高校教育の中身はむしろ、学校を取り巻く内外の環境も大きく変貌しつつある。われわれの研究会はかつて1983年にも今回と同様に、高校教師の全国調査を行った。そうしたデータとの比較を含めて、この間の高校教育の変化をまず考察しておきたい。その上に立って、改革の個別の問題も含めて、こうした高校教育改革に対する全国の高校教師の率直な評価と、

教師自身がこのような教育改革の時代にどのように対処しようとしているのか、言い換えれば教育政策の浸透過程における教員集団の受容と抵抗の問題状況を総体的にとらえ、分析を試みたい。

質問の構成は、授業の仕方、具体的な勤務状況、職員室での話題、悩み、生徒観、教職観、高校教育観、保護者の教師期待、各種制度改革への態度、新設の授業やカリキュラムなどの評価、変革期の学校や教師の態度や意見評価、職場環境の変化、今後の高校教育の変化などにわたっている。分析には、教師の性別、年齢、出身学校（大学）、および勤務校の学校ランク（大学進学率を指標）の属性を基本クロスとして用いた。

2. 調査対象の特質

調査対象は全国の高校教師であり、表1-1に示すサンプルの基本的属性より、その特性として、次の点が指摘できる。

男性教師が8割、女性教師が2割のサンプル構成である。参考までに2001（平成13）年度の学校基本調査（文部科学省）によれば、全日制の高校教師の性別構成比は、男性73.6%（186,848人）、女性26.4%（67,087人）である。年齢はいわゆる中堅世代（31～40歳、41～50歳）が中心で、クラス担任者は54.3%である。年齢からも予想されるが、経験年数は11～20年の勤務校歴・現任校歴からして、高校教育の教育現場の実態に十分精通された先生方が多いことがわかる。調査対象の勤務校は、大学受験を目指す生徒の多い進学校が半数以上を占めている。しかし、回答者のキャリアからすれば、いくつかのタイプやランクの高校を経験してきた先生方とみることができよう。教師の回答評価には、こうした豊かなキャリア経験に基礎づけられている点も十分考慮してよいであろう。

調査概要

1. 時期 2002年2月～3月。
2. 対象 全国47都道府県の公立・私立高校教師。
3. 方法 111校に依頼、77校から回答を得る。

校長または進路指導主任を通して、1校20名に依頼配布。回収はベネッセ教育総研へ直接送付。

4. サンプル数 774名（男性613名、女性161名）が有効回答。

表1 - 1 サンプルの基本的属性

(%)

本人属性	性別	男性613名(79.2)		女性161名(20.8)							
	年齢	25歳以下 23名(3.0)	26～30歳 58名(7.5)	31～40歳 266名(34.4)	41～50歳 277名(35.8)	51～60歳 147名(19.0)	61歳以上 3名(0.4)				
	担当教科	英語 20.7	国語 16.7	数学 18.5	地歴・公民 15.9	理科 11.5	芸術 2.7	家庭 2.5	体育 8.4	その他 3.2	
	クラス担任	担任している 54.3(1年31.3 2年28.7 3年40.0)			担任していない 45.7						
	役職・校務分掌	校長・教頭 2.0	教務 17.8	総務(庶務) 7.6	進路指導 25.4	生活指導(生徒指導) 15.7	保健(厚生) 5.9	研究(開発) 0.9	その他 24.6		
	出身大学等	国公立教育系大学 / 国公立非教育系大学 20.2		30.9		私立教育系大学 / 私立非教育系大学 6.1		35.7		大学院 6.1	短大・その他 1.2
教職歴	経験年数	5年以下 9.6	6～10年 10.4	11～20年 41.3	21～30年 27.0	31年以上 11.7					
	勤務校数	1校目 13.2	2校目 20.2	3校目 28.4	4校目以上 38.2						
	現任校の年数	1年目 13.2	2年目 12.9	3年目 10.8	4年目 10.6	5年目 9.6	6年目以上 42.9				
勤務校の属性	課程	全日制 99.6	定時制 0.4	通信制 0.0							
	学科	普通科 71.2	普通科と専門学科の併設 22.1		総合学科 5.6	その他 1.1					
	4年制大学進学率	90%以上 37.1	80～89% 15.4	60～79% 17.3	30～59% 13.9	30%未満 15.9	よくわからない 0.4				

第2章

ふだんの教育活動

木下 勉

『モノグラフ・高校生』vol.10「高校教師の教育観とライフサイクル」(1983年)から約20年。この間に学校を取り巻く環境は大きく変化してきた。多様な変化の中、高校教師の学校生活や意識にどのような変化がみられるかを「授業」「生徒との接し方」「休日の出勤」「高校の授業で大事な教え方」を中心に、以下検討してみたい。

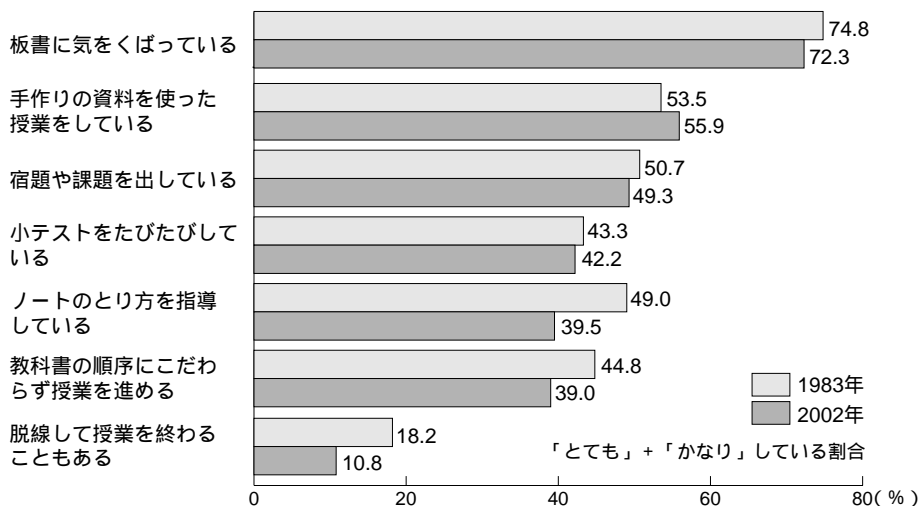
1. 授業

この約20年、授業に関しては各教科の指導内容の変化だけでなくさまざまな変化がみられる。学校で実施されてきた個々の授業は、担当教師の創意・工夫と経験によって、実に多様で個性的に展開されてきた。しかし、何かの機会に本人が自分の授業のやり方などを公開しない限り、どの教師の授業がどのような方法のものか、授業中にどのような言動がなされているのかについては教科が違えばわからない。また、生徒側からも伝わってきにくいきわめて密室性の高いものであった。し

かし、近年は年度当初に年間授業計画、シラバス作成、自己申告、それに基づく管理職による授業観察、さらには教科内や校内研修会としての授業公開が進められてきた。また、保護者対象の公開授業、中学生や地域対象の公開授業、中学校や小学校への出前授業なども進められている学校もある。こうした変化の中で、生徒や保護者の授業に対する意識も変わってきた。学校によっては生徒や保護者から、かなりストレートな授業批判や授業改善要望が出されているところもあると聞く。その一方、出席率は良好なものの、授業中はひたすら寝ているか携帯電話でメール交換ばかりしているなど、ほとんどやる気を見せない生徒に苦慮している学校もある。こうした変化の中で、教師の授業観にはどのような変化がみられるだろうか。

図2-1は、授業に関しふだんしていることを1983年調査と比較したものである。上位項目に変化はあまりないが、「ノートのとり方を指導している」「教科書の順序にこだわらず授業を進める」

図2-1 ふだんの授業でしていること(1983年との比較)



「脱線して授業を終わることもある」では、約20年前に比べて減少している。

表2-1は、性別・年齢別・進学率別に比較したものである。女性教師は「手作りの資料を使った授業をしている」「宿題や課題を出している」「小テストをたびたびしている」の項目において男性教師より数値が高い。きめ細かな工夫を心がけている様子がうかがえる。

年齢別では30歳以下のフレッシュな教師層は、「板書の工夫」「手作り資料」「宿題や課題」を工夫している。同じ傾向にある30歳以下層でも25歳以下は、あくまでも教科書の順序に基づきながら工夫しているが、26～30歳層は教科書の順序に一番こだわっていない。数年の教師経験に基づき自分流を打ち出し、板書を工夫し、宿題や課題も出しながら比較的自由に授業を展開している。31～40歳層は、「小テスト」や「宿題や課題」を織り交ぜながら生徒自身にやらせる形態の授業を展開している。41歳以上のベテラン層はおおむね各項目ともに低い。

進学率別にみると、4年制大学の進学者の割合が90%以上の上位進学校では、「宿題や課題を出している」「小テストをたびたびしている」が多

いが、「板書に気をくばっている」「ノートのとり方を指導している」「脱線して授業を終わることもある」は少ない。ここには受験に向けた授業や生徒の勉強スタイルがある。教科にもよるだろうが、授業では新しいことの解説、理解できたか否かは宿題・課題で各自チェックといった役割が明確で、生徒も出された宿題・課題の意味を理解し、それなりにやってくる。図2-2(p.13)にあるように、約半数の生徒が予習・復習をやっている認識のもとに成立する授業である。「宿題や課題を出している」が次に多いのは、30～79%の学校である。図2-2によれば、この層の学校では生徒が「授業の予習・復習をやっている」という認識を持っている教師は13.2%である。したがって「宿題・課題」には何とか勉強の習慣をつけさせるための意味がある。30%未満の学校では「板書に気をくばっている」「手作りの資料を使った授業をしている」「ノートのとり方を指導している」で数値が高い。また、「教科書の順序にこだわらず授業を進める」「脱線して授業を終わることもある」も一番高く、生徒の興味関心を引きつけるべくさまざまな工夫がなされていることを示している。

表2-1 ぶだんの授業でしていること × 性・年齢・進学率

(%)

	全体	性別		年齢別					進学率別			
		男性	女性	25歳以下	26～30歳	31～40歳	41～50歳	51～60歳	30%未満	30～79%	80～89%	90%以上
板書に気をくばっている	72.3	71.6	75.2	77.2	82.8	73.1	75.4	60.2	78.5	73.2	74.1	67.8
手作りの資料を使った授業をしている	55.9	53.1	67.1	77.3	68.9	54.0	52.7	56.7	63.3	54.0	50.5	56.1
宿題や課題を出している	49.3	46.1	61.7	50.0	55.2	54.2	45.6	44.8	33.4	51.6	35.0	52.3
小テストをたびたびしている	42.2	39.8	51.3	50.0	43.1	44.6	40.6	38.8	32.5	42.6	41.4	42.7
ノートのとり方を指導している	39.5	39.2	40.8	34.5	41.2	36.5	46.9	66.6	47.1	42.1	39.7	35.1
教科書の順序にこだわらず授業を進める	39.0	39.8	35.9	31.8	50.0	35.4	39.4	41.5	47.0	36.0	39.2	38.5
脱線して授業を終わることもある	10.8	11.9	7.0	9.1	12.0	9.5	12.1	11.3	17.1	11.4	13.9	7.2

「とても」+「かなり」している割合

こうしてみると、板書に気をくばったり手作りの資料を使ったり宿題や小テストを実施するなど、約20年前と同様、熱心できめ細かな指導がなされていることがわかる。とりわけ進学実績があまり上がっていない学校では、生徒の興味関心を引くために多様な工夫がなされている。一方、全体的には「教科書の順序にこだわらず授業を進める」「脱線して授業を終わることもある」などの数値は減少した。こうしたことは授業計画の提出や授業公開が進められてきたこと、学校の個性化など競争原理の導入によって、授業にもゆとりのない状況が生まれつつあり各教師の持ち味や独自の授業展開法よりも画一的、均一的な授業が求められていることの1つの現れではなからうか。

2. 生徒観

生徒観に関しては、1983年調査と今回の調査とでは項目や問い方に違いがあるため、数値的な比

較はできない。しかし1983年調査での教師の生徒観は「クラブ・部活動に打ち込み、高校生活を楽しんでいる生徒が一番多い、次いで大学進学を目指して勉強する生徒が多くいる」というものであった。

表2 - 2は、現在勤務している学校の生徒をどのようにみているかを「ほぼ全員 + 7割くらい」でまとめたものである。「規則を守る生徒」が76.8%と一番多い。次いで「授業中、熱心に授業を受ける生徒」61.8%、「学校行事に積極的に参加する生徒」57.8%である。

「友だちが多い生徒」は52.6%で、かろうじて50%台をキープしたにすぎなかったのは意外であった。携帯電話の普及で以前のように生徒同士の友人関係が顕在化しなくなったこと、群れてはいても友人関係という密な人間関係をなかなか結ばうとしないことの反映かもしれない。全体的には、近頃の高校生が「表面的には従順でおとなしい」と言われることが表れている生徒観である。

表2 - 2 生徒観 × 性・年齢

	全体	性別		年齢別				
		男性	女性	25歳以下	26～30歳	31～40歳	41～50歳	51～60歳
規則を守る生徒	76.8	78.2	71.5	52.1	69.0	76.6	79.6	78.1
授業中、熱心に授業を受ける生徒	61.8	63.1	57.0	43.4	49.1	62.1	65.3	62.6
学校行事に積極的に参加する生徒	57.8	57.5	58.5	56.5	57.9	56.2	61.7	53.8
友だちが多い生徒	52.6	52.5	53.2	78.3	50.9	58.8	50.9	42.8
部活動に入って活動する生徒	40.6	41.5	37.4	47.8	22.8	37.8	46.0	40.6
自分の進路を具体的に決めている生徒	32.1	33.4	26.6	17.4	26.4	31.3	33.2	35.6
授業の予習復習をする生徒	24.3	24.0	25.1	17.4	14.1	25.8	27.8	19.8
自分の意見をみんなの前で発言できる生徒	17.0	14.8	25.6	13.0	5.3	14.3	20.3	20.6

「ほぼ全員」 + 「7割くらい」の割合

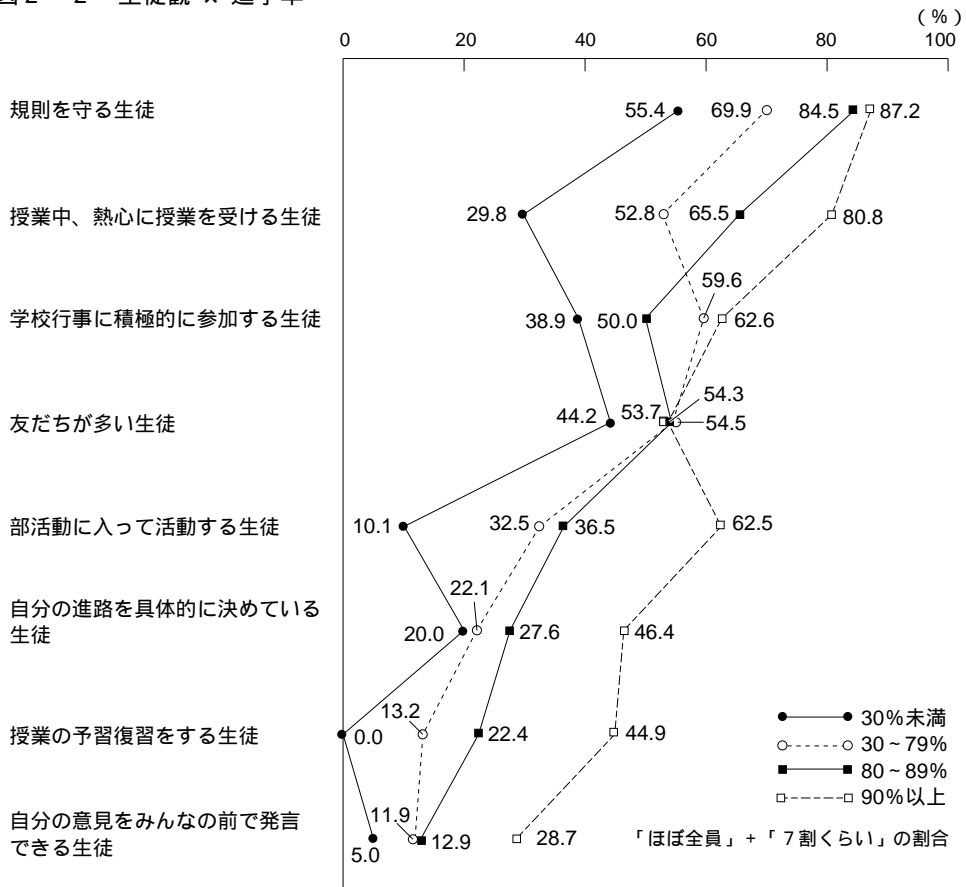
性別では、おおむね男性教師の生徒に対する評価は高く、女性教師の生徒観は辛いものである。男性教師が「規則を守る生徒」「授業中、熱心に授業を受ける生徒」で評価が高いのに対し、女性教師は「自分の意見をみんなの前で発言できる生徒」といった内面的な部分の評価が高い点が特色である。

年齢別では、41～50歳層が評価はおおむね高い。いくつかの学校を経験した上で現任校の生徒に対し余裕を持ってみている。それに対して25歳以下の教師は「友だちが多い生徒」「部活動に入って活動する生徒」では評価が高いが、「授業中、熱心に授業を受ける生徒」「自分の進路を具体的に決めている生徒」では最も低い評価となっている。この傾向は26～30歳層にもみられる。教師の中で年齢的に精神的に最も生徒に近いスタンスを持つだけに期待感が先行するためか、あるいは勤務校が実際に厳しい状況にあるためかもしれない。

図2-2は進学率別にまとめたものである。上

位の進学校はほとんどの項目で評価が高い。中間の高校が上位の進学校と近値な項目は「友だちが多い生徒」である。また、30～79%の学校では「学校行事に積極的に参加する生徒」で80～89%の学校より数値が高い。30%未満の学校はすべての項目で一番低い評価となった。特に「部活動に入って活動する生徒」が10.1%、「友だちが多い生徒」も44.2%と他の学校に比べて低い点が注目できる。進学率が高い学校では、学校におけるさまざまな活動に積極的に取り組む姿勢を持つ、いわゆる「手がかからない生徒」が集まるから、各項目ともに評価が高くなる。中間の学校では、学校行事や友だちなど生徒が仲間内で楽しくやれる部分では高い評価となっている。しかし、進学率が低い学校では、規則はまあまあ守るものの学校の場で評価できる面が少ないというのが教師からみた評価である。

図2-2 生徒観 × 進学率



3. 日頃していること

毎年、教育実習を受け入れている。実習を終えてから感想を聞くと、多くが「授業以外の仕事量の多さ」を口にする。朝からさまざまな用事で訪ねてくる生徒との対応、授業のない空き時間や昼休み、放課後などに組み込まれている会議、放課後の個人指導や部活動指導、小テストや提出物のチェック、明日の教科指導のためのプリント作成準備など、短期の実習期間で知りえたことをあげてみせる。実習に来る数年前、高校に在学していたときには教師の仕事がかくも忙しいとはぜんぜん気づかなかったとも言う。実際、多様な仕事が学校にはある。しかも、近年は各種の書類作りなど事務の仕事の量が飛躍的に増えてきた。また、土曜休日のしわ寄せが他の5日間に重くのしかかってきている。そこで、生徒指導、部活動、休日出勤について、どのような実態となっているかを検討してみたい。

1) 生徒指導

表2-3は、日頃教師が学校などでしていることを1983年調査と比較してまとめた。「生徒の年

賀状にはまめに返事を書いている」「クラブ活動を熱心に指導している」において、今回の調査の方が10ポイント前後増えている。逆に「担当する教科の専門書にはよく目を通している」では、13ポイント減少している。男女ともに1983年調査と+5ポイント以上の数値の開きがあるのは、「生徒の年賀状にはまめに返事を書いている」「生徒に人気のあるマンガや音楽に接するようにしている」で、「クラブ活動を熱心に指導している」は男性教師のみ+12ポイント。男女ともに-5ポイント以上の開きのある項目は「担当する教科の専門書にはよく目を通している」である。とりわけ女性教師は「授業では指導案や講義ノートを作っている」で-10ポイント、「担当する教科の専門書にはよく目を通している」で-20ポイントである。年齢別では30歳以下で「担当する教科の専門書にはよく目を通している」「授業では指導案や講義ノートを作っている」で-5~6ポイント、「クラブ活動を熱心に指導している」は+6ポイント、「生徒に人気のあるマンガや音楽に接するようにしている」では+17ポイントとなっている。

今回調査のQ7で、「高校の教師」の仕事をどのように自己評価しているか聞いている。詳しい分析は次章でなされるが、1983年調査と比べてみ

表2-3 日頃していること × 性・年齢（1983年との比較）

	(%)							
	全体		男性		女性		30歳以下	
	1983年	2002年	1983年	2002年	1983年	2002年	1983年	2002年
生徒の質問や相談には親身に答えている	92.5	93.0	92.7	92.4	94.6	95.0	90.7	91.3
タバコを吸っている生徒を見かけると厳しく注意する	90.8	86.7	92.2	87.7	79.5	82.5	83.9	83.8
生徒の年賀状にはまめに返事を書いている	70.1	80.1	68.9	78.8	79.1	85.0	73.6	71.6
37度くらいの熱でも無理して出勤している	63.5	66.0	63.8	66.4	60.5	64.3	65.6	66.3
担当する教科の専門書にはよく目を通している	65.3	52.2	65.3	53.7	66.1	46.6	60.1	55.6
クラブ活動を熱心に指導している	27.1	37.0	27.6	39.9	23.1	26.3	31.5	37.5
授業では指導案や講義ノートを作っている	37.6	35.3	36.0	34.2	49.6	39.3	40.6	35.0
生徒に人気のあるマンガや音楽に接するようにしている	6.8	16.3	6.5	16.1	7.7	16.8	16.3	33.3

「とても」+「かなり」している割合

ると、「とてもそう思う+まあそう思う」の合計で、「生徒と接する喜びのある仕事だ」が91.7%で6ポイント増、「体力のいる仕事だ」が85.5%で7ポイント増、「専門に関して高度の知識が必要な仕事だ」が84.7%で8ポイント増となっている。このことを併せて考えてみると、生徒の年賀状への返事やクラブ活動指導が熱心に行われ、生徒とのふれあいの喜びが具体化されている。「担当する教科の専門書にはよく目を通している」の項目では、意識の上では教職の専門性をより評価しているものの、日常的仕事の忙しさの中でなかなか実行できない現実が投影されている。

表2-4は、日頃していることを性別、年齢別、進学率別にまとめた。男女とも一番は「生徒の質問や相談には親身に答えている」で9割に上る。男性教師はタバコ指導、クラブ指導、担当する教科の専門書に目を通すなどにおいて女性教師を上回り、女性教師は生徒からの年賀状の返事を出すが目立つ。年齢別では51～60歳層と26～30歳層が専門書を比較的多く読んでおり、なかなか読めないのは25歳以下層、次いで31～40歳層である。学校組織の中心として、また部活動指導などにおいても、最も多忙な年齢層といえる。25歳以下の新人教師ではタバコ指導など多くの項目で最下位で

ある。唯一、「37度くらいの熱でも無理して出勤している」が73.9%で突出している。

進学率別でみると、30%未満の学校では「タバコを吸っている生徒を見かけると厳しく注意する」が他より高く、それだけに日頃から生徒指導に力点がある様子がうかがえる。また、生徒のクラブ活動の低調さを受けて「クラブ活動を熱心に指導している」の数値が一番低い。80～89%の学校では、熱があっても出勤するやクラブ活動の指導の数値が高く、逆に専門書に目を通すことが比較的少ない。これは勉強にしてもクラブにしても教師依存が高い生徒層であるから、日常的仕事はかなり多いためと考えられる。90%以上の学校ではタバコ指導や生徒に人気のマンガや音楽に接することは一番低いが、他の項目はおおむね高い数値となっている。

2) 部活動の指導

近年の教育行政の動きは、学校におけるクラブ活動は社会体育や社会教育に移行させていきたい流れがある。また、外国の教育関係者からは放課後や休日に教師が部活動指導に時間を費やすことに驚きと「教師は子どもの世話係ではない」「教師は科目を教えるもの」といった批判がある

表2-4 日頃していること × 性・年齢・進学率

(%)

	全体	性別		年齢別					進学率別			
		男性	女性	25歳以下	26～30歳	31～40歳	41～50歳	51～60歳	30%未満	30～79%	80～89%	90%以上
生徒の質問や相談には親身に答えている	93.0	92.4	95.0	91.3	91.2	91.3	94.9	93.0	94.2	91.4	93.0	93.3
タバコを吸っている生徒を見かけると厳しく注意する	86.7	87.7	82.5	61.9	92.4	89.2	85.2	86.7	92.2	88.3	88.8	82.2
生徒の年賀状にはまめに返事を書いている	80.1	78.8	85.0	52.2	79.4	81.5	79.4	83.3	80.2	80.4	76.5	81.3
37度くらいの熱でも無理して出勤している	66.0	66.4	64.3	73.9	63.2	71.8	62.6	62.2	63.6	62.9	73.1	66.3
担当する教科の専門書にはよく目を通している	52.2	53.7	46.6	39.1	62.1	46.0	52.7	60.5	50.5	52.3	48.3	53.1
クラブ活動を熱心に指導している	37.0	39.9	26.3	40.9	36.2	43.4	31.2	36.4	31.4	34.6	40.5	38.8
授業では指導案や講義ノートを作っている	35.3	34.2	39.3	31.8	36.2	37.1	34.7	33.1	33.1	32.6	33.7	37.9
生徒に人気のあるマンガや音楽に接するようにしている	16.3	16.1	16.8	39.1	31.0	17.7	14.5	7.6	19.0	20.5	16.4	12.1

「とても」+「かなり」している割合

(2002年8月4日朝日新聞)

しかし、表2-3で1983年調査と比較してみると、現在は部・クラブ活動の指導は以前にも増して熱心に行われている。実際、高校の現場にいると「部活動指導こそ生き甲斐」といった教師をどの学校でもみかける。その中には自分が高校時代にやってきた部活動を指導したくて教師になった人もいれば、教師になって生徒とともにやっていくうちに部活動のおもしろさに目覚めた人などいろいろである。表2-5は部活動の指導状況を性別、年齢別、進学率別にまとめたものである。今回と1983年調査では調査項目に違いがあって比較できない部分があるが、1983年調査では運動部の顧問が50.0%、文化部の顧問が40.4%、顧問をしていないが8.7%であった。

今回調査では運動部59.4%、文化部27.8%、顧問をしていないが6.8%である。男性教師の66.9%が運動部顧問、女性教師の54.4%が文化部顧問をしている。年齢的には26～40歳層が運動部主顧問をより多く務め、41～60歳層が文化部主顧問をより多く務めている。進学率別では30%未満の学校では18.2%が顧問をしていない。90%以上の学校では40.8%が運動部主顧問、副顧問の26.2%と合

わせると、67.0%が運動部顧問をしている。

中学校などではクラブ活動を生徒に奨励し熱心に指導することが生徒の興味関心を学校に向かわせ生徒指導上有効といわれるが、高校の場合はクラブ活動をするか否かが生徒の個人意志に任されている学校が多く、生徒指導上の役割は比較的小さい。生徒が学校の場で積極的に活動する学校ほど数多くの部活動や同好会があり、生徒の自主的活動が尊重されている。しかし、予算上や管理上から誰か教師が顧問として指導する体制をとる以上、顧問の役割がまわってくる。スポーツ系でもケガなどの可能性が高い部や休日の引率の多い部は、教師から敬遠され顧問のなり手がなくて、調整にあたる生徒指導部などが年度当初に苦勞する学校も多い。一方、生徒との日頃のつきあいから、1人で3、4の部の顧問を頼まれている教師もいる。いずれにしても「学校管理下の事故」「顧問の責任」などが厳しく問われる昨今、一昔前のようにおおらかな気持ちで引き受け、書類に印鑑だけ押ししていればよかった顧問は少なくなり、一旦顧問を引き受けた以上、年間計画表や緊急連絡一覧の作成にかかわり、日頃の活動にも積極的にかかわる必要が以前にも増して多くなってきている。

表2-5 部活動の指導 × 性・年齢・進学率

(%)

	全体	性別		年齢別					進学率別			
		男性	女性	25歳以下	26～30歳	31～40歳	41～50歳	51～60歳	30%未満	30～79%	80～89%	90%以上
運動部の主顧問	36.6	43.3	11.3	30.4	42.1	44.0	31.8	31.3	35.5	34.0	35.1	40.8
運動部の副顧問	22.8	23.6	20.0	26.1	22.8	22.2	24.8	20.1	17.4	22.6	18.4	26.2
文化部の主顧問	21.4	16.1	41.3	8.7	17.5	18.8	24.5	24.3	19.0	23.7	30.7	16.3
文化部の副顧問	6.4	4.6	13.1	17.4	5.3	6.0	6.2	6.3	7.4	9.9	5.3	3.5
運動部・文化部の顧問	6.0	5.4	8.1	4.3	7.0	7.1	5.8	4.2	2.5	3.4	9.6	8.2
顧問をしていない	6.8	6.9	6.3	13.0	5.3	1.9	6.9	13.9	18.2	6.4	0.9	5.0

3) 1か月の休日出勤日数

2002年4月から学校完全週5日制になり、土曜日が休日となった。しかし、多くの学校で土曜日のあり方が問題となり、部活動指導以外に土曜補習や休日活動などがなされている。表2-6は日曜日も含めて1か月の休日出勤回数を性別・年齢別・進学率別にまとめたものである。全体では休日出勤なしが18.1%。すなわち80%以上の教師が何らかの形で休日出勤をしている。男性では47.9%が3日以上、女性では43.1%が1~2日の休日出勤をしている。年齢別では40歳以下の年齢層の55%前後が週3日以上である。40歳以上では1~2日が40%台で最も多い。

進学率別では、進学率の上昇に比例して休日なしの数は減り、何らかの形で休日出勤する率が高くなる。今年度から休日の出勤目的は多様化の方向にあるが、やはりクラブ指導が主流と考えられる。生徒のクラブ活動が熱心な進学率90%以上の学校では、5日以上が24.6%と比較的多くなる。30%未満の学校では休日出勤なしが30.3%と他の学校に比べ突出して多い。

以上、1) 生徒指導、2) 部活動の指導、3)

1か月の休日出勤日数と3項目の検討をまとめてみると、勤務している学校によって教師の勤務内容が以前にも増して変わってきたといえる。

4. 新しい学力観

新しい学力観を含め、「現在、高校で大事な教え方」について表2-7は「とても大事」+「やや大事」の数値でまとめたものである。全体で多くの項目が90%を超えている。女性が+6ポイント前後上回ったのは「討論や発表を取り入れた授業」「視聴覚教材を取り入れた授業」である。「コンピュータを取り入れた授業」では13.6ポイント上回る。年齢別では「生徒が楽しいと感じられる授業」は26~30歳層が96.5%と高いのに対し、51~60歳層は89.6%とやや低い数値となっている。他の項目を見比べても30歳以下の年齢層は生徒との人間的ふれあい、受験対応、視聴覚教材利用、職業教育で他より高い数値を示し、より意欲的であるが、41歳以上のベテラン層はおおむね他の年齢層よりも低い数値となっている。進学率別では、視聴覚教材やコンピュータを取り入れた授業、職

表2-6 休日出勤の回数 × 性・年齢・進学率

		(%)											
全体		性別		年齢別					進学率別				
		男性	女性	25歳以下	26~30歳	31~40歳	41~50歳	51~60歳	30%未満	30~79%	80~89%	90%以上	
5日以上	21.1	24.5	8.2	21.7	23.2	28.6	16.4	16.0	10.9	20.8	23.5	24.6	
3~4日	22.0	23.4	17.1	34.7	32.1	24.4	20.8	15.2	19.3	22.0	22.6	23.1	
1~2日	38.7	37.5	43.1	21.7	33.9	35.0	43.4	41.7	39.5	39.4	36.5	38.0	
なし	18.1	14.6	31.6	21.7	10.7	12.0	19.7	27.1	30.3	17.8	17.4	14.2	

業に結びつけた知識を得られる授業をより大切と考えているのは30%未満の学校。30～79%の学校では職業に結びつけた知識を得られる授業の数値は減り、「受験により対応した授業」の数値が高くなる。80～89%の学校では「討論や発表を取り入れた授業」を他のレベルの学校より望む傾向がある。90%以上の学校では、楽しいと感じられる授業や討論や発表を取り入れる授業などの評価が他の学校より低い。

このように検討してみると、多くの項目がともに高い数値で支持されている点から「考える力」「プレゼンテーション能力」「情報を積極的に生かす能力」といった新しい学力観やそれにつながる新しい授業形態など、今の時代のニーズを取り入れていく姿勢は多くの教師の共通認識であり共通課題になっている。しかし、現実には日々相対している生徒とのかかわりから大切な授業の教え方を発問すると、そこに違いがでてくる。進学実績があまり上がっていない学校では、将来の職業に結びつく知識や、視聴覚教材などを用いて、何とか授業に興味関心を引き出す工夫が必要となる。こ

れは新しい学力観とか新しい授業法というよりすでに個々の学校や教科担当の下で試行錯誤が重ねられ実施されてきたものといえる。進学率の高い学校ではあくまでも受験に対応した授業が中心であり、討論や発表などはあまり必要とされない。それは教師の意識の問題だけでなく生徒側のニーズが受験にあるからだ。討論や発表をやってみればそれなりに新鮮で得るものも多いだろうことはわかっていても、授業は受験に役立つのか否かの価値基準で対応してくる。教科書を一通り完結する進度で授業を展開することが強く求められる。これに対して進学実績的に中間の学校では進路指導上の必要性から進学に結びつく授業を支持する一方、討論や発表を取り入れ生徒のさまざまな能力を啓発していく教え方も一番支持されている。実際、こうした学校では生徒も教師側の多様な授業展開に結構のってくる。今年度から実施された「総合学習」の状況をいくつかの学校に聞いてみても、生徒も教師側もおもしろがって取り組んでいる様子が伝わってくるのはこうした学校である。

表 2 - 7 現在、高校で大事な教え方 × 性・年齢・進学率

(%)

	全体	性別		年齢別					進学率別			
		男性	女性	25歳以下	26～30歳	31～40歳	41～50歳	51～60歳	30%未満	30～79%	80～89%	90%以上
基礎的な力のつく授業	98.8	98.5	100.0	100.0	100.0	97.7	100.0	98.0	99.2	99.2	100.0	98.2
生徒が興味や関心を持てる授業	98.1	97.8	99.3	100.0	100.0	97.4	100.0	94.5	95.8	97.5	100.0	98.6
生徒が自分で調べたり研究したりする機会の多い授業	93.0	92.3	95.6	100.0	98.2	92.5	91.3	93.8	94.0	92.8	90.6	93.3
生徒との人間的なふれあいを感じられる授業	92.7	92.5	93.6	95.4	96.5	92.1	92.4	92.4	93.4	94.9	91.5	91.6
生徒が楽しいと感じられる授業	91.4	90.9	93.6	95.4	96.5	92.1	90.2	89.6	92.5	92.8	91.3	89.7
討論や発表を取り入れた授業	90.7	89.4	96.2	90.9	93.1	90.6	89.1	93.1	91.6	91.1	94.8	88.7
受験により対応した授業	86.3	86.4	86.0	81.8	91.4	90.6	85.5	79.3	79.8	88.2	88.8	86.6
視聴覚教材を取り入れた授業	79.4	78.5	82.3	86.4	88.0	80.5	74.6	81.4	84.1	81.8	77.6	75.3
職業に結びついた知識が得られる授業	73.3	72.9	75.0	86.3	89.6	78.2	66.8	64.3	81.3	76.3	80.2	64.2
コンピュータを取り入れた授業	68.8	66.0	79.6	86.3	82.8	72.2	59.1	72.9	75.6	72.9	74.1	60.5

「とても」+「やや」大事の割合

第3章

教職観の変容と教師の悩み

穂坂明德

現在進められている高校教育改革は、教師自身の職務や教職観にどのような影響や変化が現れているのであろうか。高校教師の仕事は、青年期の若者が対象であり、どちらかといえば専門的な自律性が強い。また、一般の職業と比べても、比較的ゆとりと自由裁量がきいた、組織的統制のゆるやかな仕事のように思われてきた。しかしながら、進行する教育改革の影響は、単に顕在的な制度・組織や教育内容の改編にとどまらない。教育改革の勇ましい掛け声の中では、教師自身の問題はかすみがちであるが、教師の職業生活にも潜在的な影響を及ぼしていると思われる。実務を支える教師の職業モラルを引き出す上で、教職観や所属する職場・教師集団の特性や雰囲気を持つ意味は大きい。

ここではまず、教師の抱く教職観に関する変容をさぐりながら、教職への評価や近年の職場環境の変化が教師にもたらした影響を考察する。その上で、悩める教師の特性を明らかにしたい。

1. 教職観の変容

これまで「教師論」は数多く説かれてきた。「理想の教師」「教師の社会的地位」などをめぐり、それぞれの時代を反映し、教育への期待を込めた「教師像」が描かれてきた。しかし、一般に語られる「教師論」と、職業集団の中での教師自身のそれは微妙に違う。教育改革の時代の教師像はどのようなものか。職業として自らが従事する「高校教師」に対して、どのような職業意識を持っているのか。まず、そうした職業意識の教師特性を考察したい。

表3-1は、教職の持つ社会・経済的側面や倫理的、実務的な側面など7つの職業的な側面の評価を尋ねた結果である。教職に対し9割に上る教師は「生徒と接する喜びのある仕事だ」とみている。そのうち、積極的に「とてもそう思う」教師は、ほぼ5割である。次に多いのは、「精神的に

表3-1 教職観 - 職業としての「高校教師」

			小計	（%）		
	とても そう思う	まあ そう思う		なんとも いけない	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
生徒と接する喜びのある仕事だ	49.5	42.2	91.7	6.0	1.9	0.4
精神的に気苦労の多い仕事だ	43.7	45.8	89.5	7.9	2.2	0.4
体力のいる仕事だ	35.6	49.9	85.5	10.5	3.6	0.4
専門に関して高度の知識が必要な仕事だ	30.9	53.8	84.7	10.4	4.8	0.1
社会的に尊敬される仕事だ	5.9	41.2	47.1	36.3	14.0	2.6
経済的に恵まれた仕事だ	4.0	36.0	40.0	32.9	21.2	6.0
時間にゆとりのある仕事だ	1.9	10.4	12.3	20.3	36.8	30.6

気苦労の多い仕事だ」「体力のいる仕事だ」「専門に関して高度の知識が必要な仕事だ」という職務内容の特性を評価する項目で、85%以上（「とても+まあ」そう思う）の高い割合になっている。一方、社会的、経済的な側面の肯定的な評価は半分以下であり、さらに「時間にゆとりのある仕事だ」という側面にいたっては、12.3%と極端に低い割合である。すなわち、子どもとのかかわりが持て、専門性も生かされる仕事であるが精神的・肉体的にはかなりきつい職業であるとみている。反面、社会的・経済的にはいま一つ満たされず、多忙を強いられる職業になっている。これらの要因は、今日の高校教師に内包された潜在的な不満感となっていると思われる。

こうした教職評価の違いを教師特性との関連でさらに探りたい。表3-2は教職の評価と性・年齢によるクロスである。全国統計によれば、高校教師全体に占める女性教師の割合は4分の1前後で、職場的には少数派である。男性と女性の比較からは、「時間にゆとりのある仕事だ」を除けば相対的に女性教師の方が高い評価である。とりわけ女性の職業としてみた「高校教師」は、男性教師の評価よりも経済的な評価が高い（男性35.9%<女性56.0%）。一方、負担も大きい・体力、時間にゆとりが望めない等の点では、女性教師の

ハンディキャップとなっている。また、年齢で見ると、25歳以下の教師では、教師経験が浅いこともあり、仕事として「精神的に気苦労の多い仕事だ」「体力のいる仕事だ」「専門に関して高度の知識が必要な仕事だ」が各年齢階層で最も高い割合になっている。また、「社会的に尊敬される仕事だ」「経済的に恵まれた仕事だ」で評価が高いのは、職業としての高校教師は一般に同世代と比べて年齢のわりには社会的・経済的に好待遇である現実を反映したものであろう。さらには、近年では少子化の中で、全国的に教員採用者数が極端に少なくなっている。そうした状況を考えれば、若い教師はわずかな採用枠の難関を突破した者であり、それだけ教職の重みを強く感じている結果なのかもしれない。経済的な評価が、年齢階層が上昇するのに伴い大きく落ち込んでいる傾向を示したのは、教員歴と経済的な待遇が現実にはマッチしていないという思いが教師の意識にある。また、30歳代の教師は、「社会的に尊敬される仕事だ」「時間にゆとりのある仕事だ」の評価が各年齢層の中で低い割合である。おそらくは働き盛りの年代であることから、教職にまい進しているわりには社会的評価や報われるところが少なく、一方では職場での多忙さと、ゆとりのなさをより強く感じているのかもしれない。ところで教職評価を規

表3-2 教職観 - 職業としての「高校教師」× 性・年齢

		(%)					
	男性	女性	25歳以下	26～30歳	31～40歳	41～50歳	51～60歳
生徒と接する喜びのある仕事だ	90.3	96.9	91.3	89.5	92.4	92.4	89.8
精神的に気苦労の多い仕事だ	88.7	92.5	95.7	93.0	91.7	86.1	89.1
体力のいる仕事だ	83.2	94.4	100.0	91.2	89.1	89.0	78.1
専門に関して高度の知識が必要な仕事だ	83.4	89.9	95.7	87.8	84.6	84.0	83.6
社会的に尊敬される仕事だ	45.5	52.8	65.2	43.9	37.9	47.8	60.2
経済的に恵まれた仕事だ	35.9	56.0	69.5	50.9	44.0	36.8	30.2
時間にゆとりのある仕事だ	13.8	6.9	4.3	12.3	8.7	14.5	15.7

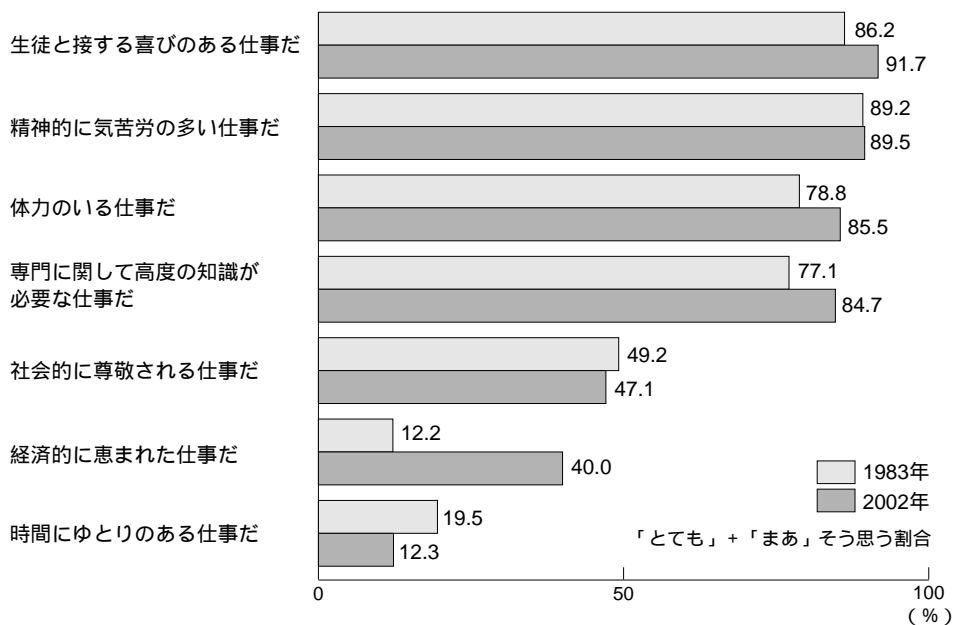
「とても」+「まあ」そう思う割合

定するのは教師個人の属性だけではない。勤務校の状態も影響する。表は省いたが、勤務校のレベルで大学進学率の高いいわゆる進学校になるほど、「生徒と接する喜び」を感じる仕事としての評価が持て、社会的・経済的な側面での評価も高くなる傾向がみられる（「生徒と接する喜びのある仕事だ」進学率30%未満=87.5% < 30~79%=90.7% < 80~89%=92.3% < 90%以上=93.6%、「社会的に尊敬される仕事だ」進学率30%未満=34.2% < 90%以上=49.5%）。教師自身にも、一般世論と同様の進学校志向の意識が根強いのかも知れない。

ところでわれわれの研究会は、今回用いた教職評価と同じ項目を使って1983年に、やはり教師の全国調査を行っている。およそ20年のインターバルの中で、教職評価にはどんな変化がみられたのであろうか。当時の社会状況を簡単に述べておけば、2度のオイルショック（73、79年）からようやく脱した日本経済は、バブル経済（86~91年）に向かい、みかけの好調を維持していた。教育界では、「戦後政治の総決算」を標榜した中曽根内閣により、21世紀に向けての教育改革のための「臨時教育審議会」（1984年）が発足する前年である。図3-1をみると、大きく変化したのは「経済的に恵まれた仕事だ」への評価である。1983年調査では12.2%であったが、2002年調査では40.0%と

なって、その差は27.8ポイント増である。次いで「専門に関して高度の知識が必要な仕事だ」7.6ポイント増、「体力のいる仕事だ」6.7ポイント増が評価を高めた。一方、評価の割合が減少したのは、「時間にゆとりのある仕事だ」7.2ポイント減、「社会的に尊敬される仕事だ」2.1%ポイント減である。こうした数値の推移は、はからずも日本の教育改革以前と着手後の高校教師の教職観の変容を物語るものになった。すなわち、教職に伝統的に規範化されていた「指導する喜び」や一定の「社会的な尊敬」という倫理的・理念的要素よりも、「経済性」「専門性」「体力」といった現実的な側面が強く現れるようになってきたということであろう。そうであれば、社会的制約が未だに強い女性の職業において、女性教師が職業としての高校教師の項目の「経済性」や「専門性」に高い評価を与えていたのも、教職を現実的に即して評価すれば、教職観の変容の当然の結果と理解できる。教師属性の分析からは、教職に対する認識評価にかなりの差異が認められた。結局、教職観の持ち方は、教師自身の仕事の意味づけにかかわり、教師生活の日々のあり方をも関係づけている。問題は教師自身がこうした現実的な側面だけでなく、教職の持つ理念的な側面との間で、職務遂行にどうバランスを持ってまい進できるかというところにあるのではないか。

図3-1 教職観（1983年との比較）



2. 教職への志向と離反

青年期に教師を志すには、それなりの動機がある。かつて教職への動機の軽薄さから、「デモ」「シカ」教師と揶揄された時代もあった。しかし、今日多様な職業選択において教職を志向する者は少なくない。むしろ進んでなりたい職業の1つになっている。表3-3は教職についたときの気持ちを尋ねた。全体では、積極的な気持ちで教職についたのが58.6%、消極的だったのが7.4%、ふつうくらいが34.0%であった。女性教師よりも男性教師の方が、より積極的であった（男性61.7% > 女性47.2%）。一方、教師生活の間に1度ならず教師を辞めたいと思った教師は62.6%、そのうち「いつもそう思っている」のは6.4%である。男性より女性の教師に多い（男性5.4% < 女性10.1%）。1度でも教師を辞めたいと思った教師は全体の約3分の2に上る。総体的には教職志向が圧倒的に強い中で、教職から離反する気持ちにはどのような要因がかくされているのであろうか。表3-4

は、就職時の教職志向や退職についての意識の強弱と、教職に対する「社会的な尊敬」「経済性」に関する評価をクロスしたものである。就職時に教職志向が強かった者ほど、教職を「社会的に尊敬できる仕事」であると強く意識している。また、退職の気持ちが強い者ほど、その評価は低くなっている。そして「経済的に恵まれた仕事」であると思うような気持ちも薄い。退職を考える意識が強まるほど、教職という職業に対して「社会的」「経済的」な評価が、共に低下している傾向が明らかになった。

一般の職種に比べて、教職は専門性と職業的な自律性が相対的に高いといわれてきた。にもかかわらず、職業的な社会化という点では、一人前の教師といわれるまでの経験量や指導技術の水準は必ずしも明確ではない。教師としての成長のために必要な職業意識の啓発や技術の向上を考えると、職場環境に依存する側面が強いのが教職の職業特性といえる。「退職を考える」タイミングも、そうした意味で教師としてのなんらかの行き詰まり、俗に言うカベにあたった状況において惹起さ

表3-3 就職時の気持ち、退職の意識

		(%)			
教職についたときの気持ち		とても積極的だった	かなり積極的だった	やや積極的だった + ふつうくらい	やや + かなり + とても消極的だった
全体		27.8	30.8	34.0	7.4
男性		29.4	32.3	32.1	6.2
女性		22.0	25.2	40.9	12.0
今までに退職を考えたとき		1度もない	1~2度あった	数回あった	いつもそう思っている
全体		37.5	32.7	23.5	6.4
男性		40.5	30.6	23.5	5.4
女性		25.8	40.9	23.3	10.1

表3-4 就職時の気持ち、退職の意識 × 教職観

		(%)	
		社会的に尊敬される仕事だ	経済的に恵まれた仕事だ
教職についたときの気持ち	とても積極的だった	54.4	42.5
	かなり積極的だった	49.8	37.1
	やや積極的だった + ふつうくらい	41.0	41.4
	やや + かなり + とても消極的だった	35.1	35.1
今までに退職を考えたとき	1度もない	52.6	40.0
	1~2度あった	49.6	41.7
	数回あった	41.7	38.3
	いつもそう思っている	20.8	37.5

「とても」+「まあ」そう思う割合

れるのであろう。

3. 職場環境の変化と教師の悩み

表3-5は、教師のふだんの気分の状態について尋ねた結果である。「いつも感じる」と「ときどき感じる」を合わせた割合に注目すると、「朝起きると学校の仕事が気になりだす」教師が59.2%と過半数を超えている。仕事のことが常に

頭から離れない精神状況といえる。次いで「朝なかなか起きられない」「朝起きると生徒の姿がちらつく」「できれば学校を休みたいと思う」などが30%台。さらに深刻な状態である、「通勤途中でどこか遠いところに逃げていきたい」「授業を途中で投げ出したくなる」などの精神的な強迫観念に苛まれる教師が11~6%。強弱の程度差は認めるにしても、職業的な鬱状態と思われる教師がおよそ3割前後に上っている。表3-6は性別、年齢による精神状態の差をみた。性別ではどの項

表3-5 ふだんの気分の状態

	(%)				
	いつも感じる	ときどき感じる	小計	あまり感じない	まったく感じない
朝起きると学校の仕事が気になりだす	17.1	42.1	59.2	32.4	8.4
放課後になると気分がはればれとする	8.9	30.5	39.4	37.7	22.8
朝なかなか起きられない	8.0	28.6	36.6	42.2	21.1
職員会議などで発言したくても、自由に言えない雰囲気がある	9.2	24.1	33.3	41.4	25.4
朝起きると生徒の姿がちらつく	6.7	24.1	30.8	51.3	17.9
できれば学校を休みたいと思う	5.8	24.4	30.2	39.8	30.1
出勤時刻になると気が重くなる	3.8	18.5	22.3	44.6	33.2
できれば生徒と顔を合わせないで学校に行きたい	4.4	13.2	17.6	37.2	45.2
通勤途中でどこか遠いところに逃げていきたい	2.1	9.3	11.4	32.4	56.2
職員室にいると同僚の目線が気になる	1.2	9.6	10.8	39.6	49.6
職員会議での自分の発言はほとんど無視されている	2.4	6.4	8.8	48.8	42.5
授業を途中で投げ出したくなる	0.4	6.0	6.4	26.9	66.7
職員室に近づかないようにしている	1.0	3.9	4.9	23.9	71.2

表3-6 ふだんの気分の状態 x 性・年齢

	(%)						
	男性	女性	25歳以下	26~30歳	31~40歳	41~50歳	51~60歳
朝起きると学校の仕事が気になりだす	58.2	62.9	65.2	54.4	63.1	55.8	59.2
放課後になると気分がはればれとする	38.9	41.5	30.4	33.9	40.6	38.8	38.4
朝なかなか起きられない	32.9	50.9	78.3	50.9	41.0	33.3	23.8
職員会議などで発言したくても、自由に言えない雰囲気がある	29.8	46.8	63.7	54.4	40.8	27.1	19.2
朝起きると生徒の姿がちらつく	28.6	39.6	43.4	36.9	34.9	27.2	25.1
できれば学校を休みたいと思う	28.7	35.9	21.7	31.6	34.9	30.1	23.1
出勤時刻になると気が重くなる	20.7	28.3	43.4	26.3	26.3	18.9	17.0
できれば生徒と顔を合わせないで学校に行きたい	17.1	19.5	8.6	21.1	22.6	17.7	8.8
通勤途中でどこか遠いところに逃げていきたい	10.7	13.9	17.3	12.5	14.3	10.9	6.1
職員室にいると同僚の目線が気になる	9.7	15.0	21.7	17.6	12.0	9.8	6.2
職員会議での自分の発言はほとんど無視されている	7.8	12.2	0.0	14.5	10.7	8.7	4.8
授業を途中で投げ出したくなる	6.3	7.0	13.6	5.4	6.5	6.6	5.6
職員室に近づかないようにしている	4.6	6.4	4.3	7.1	4.9	6.6	1.4

「いつも」+「ときどき」感じる割合

目でも全般的に男性教師よりも女性教師の方が割合が高く、ストレスが蓄積している様子である。また、年齢別では、25歳以下の若い教師に“起床時困難症”とでも呼べるような、朝から重苦しい気分状況に抑圧されている傾向が現れている。データでは、「朝なかなか起きられない」78.3%、「朝起きると学校の仕事が気になりだす」65.2%、「朝起きると生徒の姿がちらつく」43.4%、「出勤時刻になると気が重くなる」43.4%というように、他の年齢階層より飛びぬけた高率になっている。一方、中堅世代の31～40歳では、「放課後になると気分がはげれとする」「できれば学校を休みたいと思う」「できれば生徒と顔を合わせないで学校に行きたい」などの項目が比較的高く、若い教師とは異なる問題をみせている。

それでは、職場内では日頃どのように過ごしているのだろうか。それを探るために、ふだん教師間で交わされる会話の話題について尋ねた。表3-7をみると、日頃の職員室の話題の中心は、「HRや教科で受け持ちの生徒のこと」「教科の進め方や指導技術など」「新学習指導要領やカリキュラムについて」などが9割以上を占める。そのほとんどの会話は仕事に直結した話題に集中している。「歌・映画・音楽」などの娯楽的な息抜きの話題が交わされるのは40.7%で、半分以下である。教師の職場は他の職種と違い、外部社会との交流は少ない。一日の職場生活において対面相手は、ほぼ同僚と生徒たちが中心である。いきおい話題も教育関連のものに狭められがちになる。何らかの意味ですべてが教育に方向づけられた、カ

プセル状況の中での職場生活になりがちである。それだけに教師にとって職場の雰囲気は、一般の職業以上に重要な意味を持つのである。そうした職場の雰囲気が近年、教育改革の進行とともに変わりつつあるという声を聞く。職場環境の変化を尋ねた表3-8の結果にもそれは現れている。「最近、職場でゆとりを感じるものが少なくなった」という回答は、「とてもそう思う」だけでも41.0%と大きく、「わりとそう思う」を合わせてみると84.5%の圧倒的な割合になっている。また、教師自身の個人主義化を指摘する回答も80.3%と高い。こうした雰囲気を作り上げた要因は必ずしも一義的なものではない。教員管理の強化や同僚との息抜きの飲み会の減少などが7割ほどの割合であることからわかるように、教師を取り巻く職場の内部と外部の諸要因が絡み合っている。

かつてはあこがれて教職について教師が、職場になじめずに教育的情熱を失ってしまう。あるいは惰性でしか仕事をせず、最後は教育界から離れていくような事態は、生徒にも大きな影響を及ぼす結果になる。すでにみてきたところだが、6割に上る教師がこれまでに退職を考え、そのうち半数は数回以上も考えていた。表3-9、表3-10はこうした退職意識とふだんの気分や職場の変化について調べたものである。退職の気持ちが強くなる教師ほど、起床時から出勤にいたるまで、学校忌避的な症状が強く現れている。また、これまで指摘してきた職場環境の変化に対しても「最近、職場でゆとりを感じるものが少なくなった」(退職の意思「1度もない」82.3% < 「いつもそ

表3-7 日ごろの職員室の話題

(%)

	よく 話題になる	少し 話題になる	小計	ほとんど 話題にならない
HRや教科で受け持ちの生徒のこと	74.1	24.2	98.3	1.7
教科の進め方や指導技術など	46.2	46.4	92.6	7.4
新学習指導要領やカリキュラムについて	32.6	56.9	89.5	10.5
社会的課題や政治問題について	23.9	61.6	85.5	14.4
校長や上司などのこと	21.4	60.2	81.6	18.5
部活動やその指導のこと	27.5	53.9	81.4	18.5
教育行政や教育政策について	20.2	60.2	80.4	19.7
趣味やスポーツなどのこと	13.5	61.6	75.1	24.8
家族や子どもの育児や教育などのこと	12.9	61.7	74.6	25.4
最近読んだ本や雑誌のこと	9.0	60.2	69.2	30.8
教師間の人間関係やうわさなど	18.0	48.0	66.0	34.0
歌番組や映画・音楽などのこと	3.0	37.7	40.7	59.3

う思っている」91.9%）、「全般的に、教師に対する管理が強くなっている」（同様、64.2% < 77.6%）、「教師同士で、世代間の意思疎通がうまくいかない」（同様、49.6% < 75.5%）など、要するに職場環境の悪化を強く感じているのが明らかである。

矢継ぎ早に急速なテンポで進められる「ゆとり」教育の改革は、皮肉にも教師に対して現実には大きな負担となっているようだ。それは新カリキュラムに対応する新しい教育方法や内容に即した授業技術の向上や開発研究など、教授能力の革新に要

する側面だけではない。教職そのものへの不適応感を精神的に高じさせ、教師ストレスという形で不適応感を潜在的に滞留させているようだ。従来は職場環境の改善の問題や教師間の相互関係を、校長や先輩教師などが間に入って解決能力を発揮してきた。しかし、本調査に現れた今日の状況は、そういうことも困難にさせているようである。早急な対策を考えなければ、教師が本来持っていた教育への情熱や活力が萎えることにより、教育改革そのものが頓挫する結果が危惧される。

表3 - 8 職場環境の変化の感じ方

	(%)				
	とても そう思う	わりと そう思う	小計	あまり そう思わない	ぜんぜん 思わない
最近、職場でゆとりを感じる ことが少なくなった	41.0	43.5	84.5	14.0	1.6
教師も、以前より個人主義的な 傾向が進んでいる	26.6	53.7	80.3	18.2	1.4
だんだん職場環境が悪くなっている	31.3	40.3	71.6	25.3	3.1
全般的に、教師に対する管理が 強くなっている	33.0	36.2	69.2	28.1	2.7
学校現場が、以前より活気が なくなっている	21.6	46.8	68.4	29.5	2.1
職場の同僚と、飲んだり話したり する機会が減っている	22.0	46.1	68.1	28.4	3.5
管理職（校長や教頭）による指導 や管理が以前より多い	24.5	31.8	56.3	39.6	4.1
教師同士で、世代間の意思疎通が うまくいかない	12.8	41.3	54.1	42.9	3.0

表3 - 9 退職意識 × ふだんの気分

	(%)		
	朝起きると学校の仕事が 気になりだす	できれば学校を 休みたいと思う	できれば生徒と顔を合わせ ないで学校に行きたい
1度もない	52.9	16.9	10.0
1～2度あった	57.1	26.2	16.3
数回あった	71.3	45.3	23.2
いつもそう思っている	63.2	73.5	49.0

「いつも」+「ときどき」感じる割合

表3 - 10 退職意識 × 職場環境の変化

	(%)			
	最近、職場でゆとり を感じるものが 少なくなった	だんだん 職場環境が 悪くなっている	全般的に、教師に 対する管理が 強くなっている	教師同士で、 世代間の意思疎通が うまくいかない
1度もない	82.3	65.5	64.2	49.6
1～2度あった	83.3	69.7	69.9	39.8
数回あった	87.3	79.0	73.5	61.3
いつもそう思っている	91.9	87.7	77.6	75.5

「とても」+「わりと」そう思う割合

第4章

教員組織と新制度への対応

蒲生眞紗雄

1999年3月に高等学校学習指導要領の改訂（本実施は2003年度より）がなされた。今回の改訂では、学校完全週5日制の実施（2002年度より）を受けて各学校が「ゆとり」の中で特色ある教育を展開し、生徒に豊かな人間性や自ら学び自ら考える力などの「生きる力」の育成を図ることをねらいとしたという。また、国民の間に多くの異論や慎重論があった中で、同年8月の国旗・国歌法が成立した。

これらの状況を受けて教育委員会からは、教育内容のみならず教員の職場環境にも人事考課制度の導入など大きな変革を求められている。つまり、教育に対する管理強化が一層進んできたように思えるのだが、新教育課程の高校での実施を来年にひかえている中で全国の教員たちはどうとらえているのだろうか。昨今の学校現場の状況や新制度導入に対する意識や高校教育の現状認識などを含めて本章では探してみたい。

1. 教員組織の環境をめぐって

1) 校務分掌の決め方

校内の職場環境を端的に示すものの1つに、校内分掌がどのような方法で決められているかがある。表4-1は、「現在勤務している学校の校務分掌の決め方は、次のどれにあたりますか」という設問に対する回答をまとめたものである。「校長・教頭が主になって決める」が約6割（59.9%）を占め、次いで「校長・教頭に主任層が加わって決める」が約2割（21.0%）である。校長・教頭といった管理職が校内人事の主導権を握るパターンが主流となっていることが、明確に示されている。

「校長・教頭に教員から選ばれた複数の委員を加えて決める」（9.2%）「教員から選ばれた複数の委員を中心に決める」（7.9%）といった、かつ

表4-1 校務分掌の決め方 × 性・地区 校長・教頭で決めるのが主流となっている

	全体	性別		地区別								
		男性	女性	北海道	東北	関東	東京	名古屋	北陸	大阪	中・四国	九州
校長・教頭が主になって決める	59.9	61.0	55.7	<u>88.0</u>	76.6	72.8	52.6	43.4	41.8	61.6	72.1	49.5
校長・教頭に主任層が加わって決める	21.0	20.5	22.8	12.0	19.6	8.7	2.6	<u>32.1</u>	26.6	23.3	22.1	30.3
校長・教頭に教員から選ばれた複数の委員を加えて決める	9.2	8.5	12.0	0.0	2.8	1.1	14.1	7.5	<u>20.3</u>	14.0	2.3	16.5
教員から選ばれた複数の委員を中心に決める	7.9	8.2	7.0	0.0	0.0	14.1	<u>29.5</u>	15.1	10.1	0.0	0.0	0.9
その他	2.0	1.8	2.5	0.0	0.9	3.3	1.3	1.9	1.3	1.2	3.5	2.8

(%)

— は最大値

ての一般教員が主力となった人事委員会組織を作
って校内人事を調整するというやり方は、今や少
数の学校になったといえる（合計でも17.1%）。

性差は認められないが、地区別でみるとかなり
差のあることが読み取れる。東京（「校長・教頭
に教員から選ばれた複数の委員を加えて決める」+「教員から選ばれた複数の委員を中心に決める」=43.6%）や北陸（同30.4%）では、一般
教員が校内人事に関与できる割合がまだ若干残さ
れているといえる。

2) 決め方は変わったか

では、現在の校務分掌の決め方は、数年前と比
べて変わったのだろうか。この点を問うた結果が
表4-2である。数年前という表現はあいまいで
あったが、変わったと答えた者が5、6年以前ま
での数値を記しているの、これを目安としても

よいと考えた。9割弱（87.4%）の教員は、ここ
数年では変わっていないと答えている。変わった
と答えた者の中では、2、3年くらい前からとい
うのが過半数（「2年くらい前から」+「3年く
らい前から」=56.6%）を占めている。新しい学
習指導要領の改訂や国旗・国歌法の成立が、管理
強化につながったと考えている者が多いことの表
れといえよう。

もちろん、変わっていないと答えた教員たち
の中にも5、6年より前、たとえば1994年の前回の
教育課程の実施時期あたりまでを示せば、変わっ
たと答える割合はもっと多数を占めたと予測でき
る。また、性別では男性よりも女性の方に変わっ
たと答える者が多い。年齢別でみると、20代に比
べて30代以上の方が変化を感じている者が多いの
は、教職経験年数の差の表れといえよう。

表4-2 校務分掌の決め方の変化度 × 性・年齢

(%)

	全体	性別		年齢別				
		男性	女性	25歳以下	26~30歳	31~40歳	41~50歳	51~60歳
変わっていない	87.4	88.1	84.5	94.4	95.9	84.2	87.5	89.0
変わった	12.6	11.9	15.5	5.6	4.1	15.8	12.5	11.0
1年くらい前から	15.6	14.7	18.2	100.0	0.0	12.8	15.6	18.8
2年くらい前から	34.4	30.9	45.5	0.0	100.0	33.3	34.4	31.3
3年くらい前から	22.2	25.0	13.6	0.0	0.0	28.2	25.0	6.3
4年くらい前から	7.8	7.4	9.1	0.0	0.0	15.4	0.0	6.3
5年以上前から	20.0	22.1	13.6	0.0	0.0	10.3	25.0	37.5

3) 教員組織は活性化したか

都立高に勤務している筆者などは、校内人事の主導権を管理職が握るようになって、校内環境が大変よくなったという話をあまり聞かないのだが、全国ではどうなのだろうか。「現在勤務している学校の教育環境は、数年前に比べて変わってきましたか」と問うたうちの教員にかかわる項目をまとめたのが、図4-1である。

「校務分掌など学校での仕事が組織化された」（「とても」+「わりと」そう思う割合、以下同じ）は、42.1%にすぎない。「職員会議での話し合いが活発となった」と思う者は13.0%、「教員の自主的研修の機会が増えた」と思う者は6.9%と至って少数である。日の丸・君が代の入学式・卒業式での強制や人事考課制度の導入など矢継ぎ早の

教員への管理強化は、教育委員会側としては教員の意識改革や活性化に寄与するものだと位置づけているのだろうが、ここに示されたものは現場の教員側からすると、むしろ適材適所に教員を配置するのをさまたげ、職員会議での自由な意見表明の機会を奪われ、自主的研修の時間も十分に保障されていない状況を訴えている数値といえる。

2. 教師は変わりえるか

1) 高校教育観の変化

高校教師は高校教育に対して、どのような考えを持っているのだろうか。この点をまとめたのが表4-3である。「そう思う」と「どちらかというところ思う」を加えた数値に注目すると、「受

図4-1 学校の教育環境の変化度

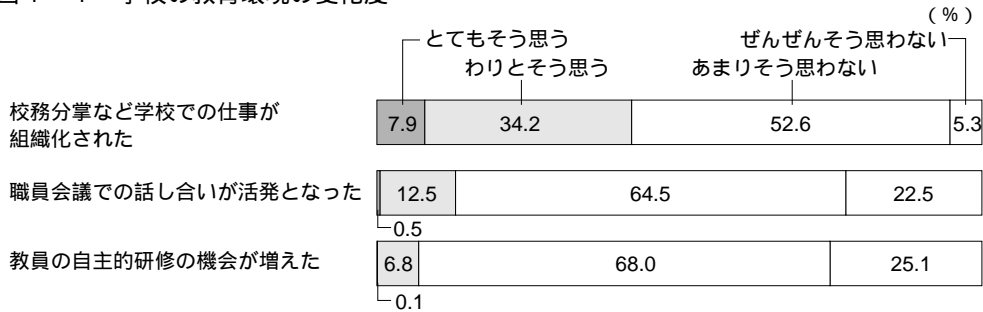


表4-3 高校教育への考え方 × 性・年齢・進学率 受験重視型の教師が多い

	性別		年齢別					進学率別			
	男性	女性	25歳以下	26~30歳	31~40歳	41~50歳	51~60歳	30%未満	30~79%	80~89%	90%以上
受験勉強でついた能力は、大学での勉学の基礎となる	82.6	83.2 > 80.5	73.9	77.2	86.8	81.8	79.6	75.0	80.5	88.8	84.4
文化祭や運動会などを、もっと積極的に奨励すべきだ	80.7	81.5 > 77.3	91.3	96.5	82.7	76.0	77.4	79.9	81.7	80.4	80.2
受験勉強は苦しみに耐える忍耐力が身につく	74.5	74.7 73.8	77.3	75.5	75.8	73.0	73.4	72.3	70.8	74.2	78.4
高校生ともなると、学力の差がひらくから学力別クラス編成をすべきだ	69.0	70.9 > 61.5	73.9	73.7	69.3	67.9	68.3	73.1	69.5	73.3	65.4
テストの結果などを公表し、競争意識をつけさせるべきだ	44.8	48.0 32.3	52.2	49.2	43.4	43.6	46.9	36.1	44.1	50.8	47.1
高校生をおとな扱いし、髪型や服装をもっと自由にすべきだ	29.2	28.0 < 33.9	26.1	29.8	28.2	31.3	27.4	22.7	28.8	26.5	33.9
受験のための勉強は、むしろ創造力を育てる上で害になる	28.1	27.0 < 32.3	34.8	29.8	25.3	26.5	34.3	31.9	28.8	25.0	27.2

「そう思う」+「どちらかというところ思う」の割合
 ____は各項目中の最大値 ___は各項目中の最小値 10ポイント以上の差

験勉強でついた能力は、大学での勉学の基礎となる」と82.6%の者は考えている。「受験勉強は苦しみに耐える忍耐力が身につく」(74.5%)し、「受験のための勉強は、むしろ創造力を育てる上で害になる」(28.1%)わけではないと考える教師が多数を占めている。今回の調査の回答者が4年制大学進学率の高い高校の教師が多い(「60~79%」17.3%、「80~89%」15.4%、「90%以上」37.1%、合計69.8%)ことも事実であるが、受験勉強が高校教育の重要な柱だという認識を多くの教師が持っていることがわかる。

もちろん、「文化祭や運動会などを、もっと積極的に奨励すべきだ」(80.7%)と考える者も多い。学校行事の活性化は、高校教育にあっては受験に次いで重要な要素なのである。一方で、生活指導面では、髪型や服装の自由化に賛成する意見は少数派(29.2%)であった。髪型や服装の自由化は心の乱れを誘発し、結局勉強にも影響すると考える教師が依然として多いことを示している。

性別では、女性教師の方が男性教師よりも受験重視の度合いが低く、逆に生徒の自主性を尊重しようとする思いが強いといえる。年齢別では、20代、特に25歳以下の若手には、生徒に厳しさ(「受験勉強は苦しみに耐える忍耐力が身につく」「高校生ともなると、学力の差がひらくから学力

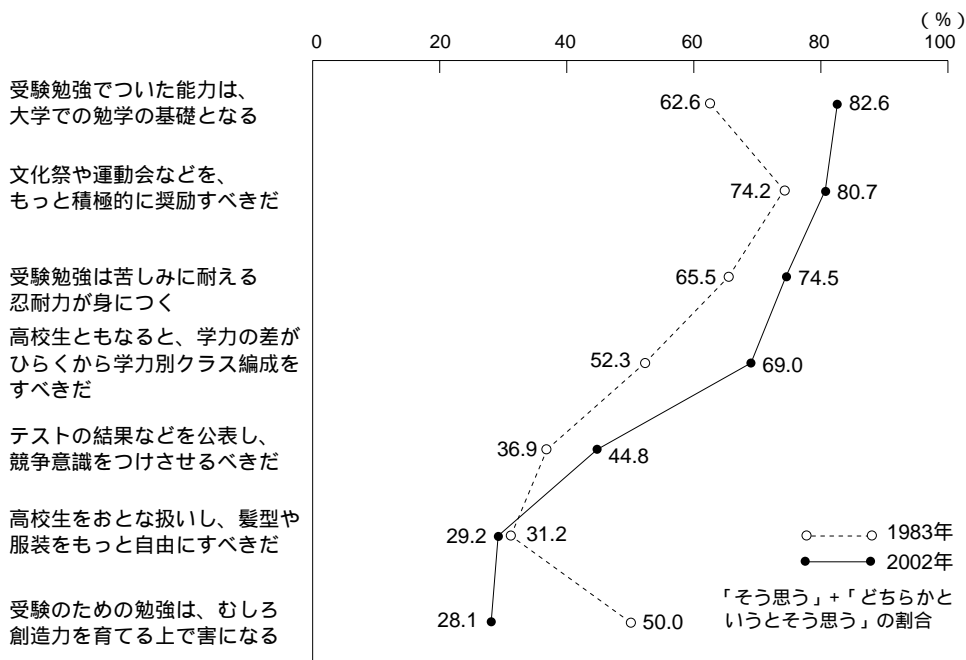
別クラス編成をすべきだ」「テストの結果などを公表し、競争意識をつけさせるべきだ」と思い、「高校生をおとな扱いし、髪型や服装をもっと自由にすべきだ」とは思わない)を求める層が多い。進学率別では、当然といえば当然だが、80%以上の高い学校の教師ほど受験重視型が多いといえる。

ところで、今回と同じ項目の調査を1983年にも実施している(『モノグラフ・高校生』vol.10「高校教師の教育観とライフサイクル」)。約20年前の教師の教育観との比較を図示したものが、図4-2である。

約20年前と比較すると、受験重視型の教師が圧倒的に増加していることがわかる。「受験勉強でついた能力は、大学での勉強の基礎となる」と思っている者の差は20.0ポイントに達する。また、約20年前には学力別クラス編成の賛否は、若干賛成者が多い程度(52.3%)であったが、今回は7割を占めている。学力別クラス編成は生徒を差別化するものだとして反対する議論は、一人一人の生徒の能力に応じて育てるべきだという意見によって変われつつあることを、この数値は明確に示しているといえる。

さらに、約20年前には受験勉強の必要性を認めつつ、一面で受験一辺倒では創造力を育てる上で

図4-2 高校教育への考え方(1983年との比較)



害になると、半数の教師は疑問を持っていたが、今回はそのような意見は21.9ポイントも減少している。今回の回答者に進学校の教師が多いことも事実であるが、受験のための勉強も、かつてのような問題演習を主としたものから考えさせる内容や課題解決型、小論文、レポート作成など多様なものになったことも関係しているといえよう。

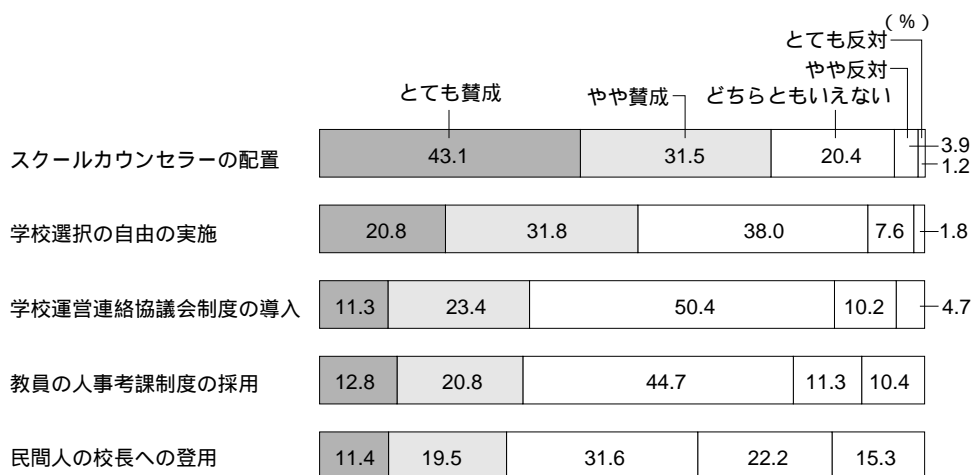
一方で、髪型や服装の自由化についての考え方の差はわずか2ポイントであり、しかも約20年前より賛成の割合が減っている。生徒に対する認識は、約20年間ほとんど変化していないといえる。むしろ、この点は時代の変化の中で教師の認識を

もっと改善する必要があるのではないだろうか。もっとも、厳しい条件の中にいる教師からは、現実を無視するなというおしかりを受けるかもしれない。

2) 新制度導入への賛否

ここ数年の間に教育委員会の主導で学校現場に導入された制度に対して、現場の教師たちはどう思っているのだろうか。図4-3は、その賛否を問うた結果である。「スクールカウンセラーの配置」(74.6%、「とても」+「やや」賛成の割合、以下同じ)と「学校選択の自由の実施」(52.6%)

図4-3 新制度導入への賛否 積極的には賛成していない



の2つ以外には、賛成は過半数に達していない。多様な生徒の心のケアにスクールカウンセラーが必要なことは、多くの教師が実感として持っていた。配置はむしろ遅すぎるといった方がよいだろう。実態が今一つ明確でない学校運営連絡協議会制度の導入については、過半数（50.4%）が「どちらともいえない」と判断できかねている。はっきりと管理強化につながる「教員の人事考課制度の採用」については、33.6%しか賛成していない。特に、新制度の目玉の1つともいえる「民間人の校長への登用」については、賛成（30.9%）より反対（37.5%「やや」+「とても」反対の割合）

の方が多。当然、教職経験者としてのプライドからの反発も含まれているといえよう。

表4-4は、性別・年齢別のクロス集計である。性別では、女性教師の方が学校運営連絡協議会制度や人事考課制度に対する賛成の割合が低い。年齢別では、20代、特に25歳以下の新人層に新制度導入に対する賛成意見が多い。人事考課制度についても過半数以上（52.2%）が賛成している。勤評闘争などの経験のない層にとっては、営利を目的とした民間企業でも行われているのと同じだから当然だという認識なのであろう。

表4-4 新制度導入への賛否 × 性・年齢

	全体	性別		年齢別				
		男性	女性	25歳以下	26~30歳	31~40歳	41~50歳	51~60歳
スクールカウンセラーの配置	74.6	73.9 <	77.2	86.9 >	85.9 >	77.1 >	71.0	70.6
	20.4	20.4	20.3	13.0	14.0	18.8	22.8	21.9
学校選択の自由の実施	52.6	52.6	52.6	65.2 >	63.1	52.1	52.3	48.3
	38.0	37.6 <	39.6	26.1	31.6	39.9	38.2	38.5
学校運営連絡協議会制度の導入	34.7	36.8	26.1	47.8	30.3	37.3	32.1	34.3
	50.4	45.8	68.6	52.2	60.7	51.7	51.8	41.3
教員の人事考課制度の採用	33.6	35.9	24.0	52.2	38.2 >	33.5 >	32.7 >	30.5
	44.7	40.5	62.0	43.5	50.9	51.0	38.5	44.0
民間人の校長への登用	30.9	31.8 >	27.3	26.0	28.1	32.7	29.3	32.2
	31.6	30.7 <	35.4	39.1	36.8	32.3	29.7	30.8

上段は「とても」+「やや」賛成の割合、下段は「どちらともいえない」の割合は10ポイント以上の差 は最大値

3) 保護者の期待に対する認識

表4-5は、「現在勤務している学校の保護者は、教師にどのような期待を持っているとお考えですか」という問いに対する回答をまとめたものである。

「わかりやすい授業ができ」て(95.2%、「とても」+「わりと」そう思う割合、以下同じ)、「クラスの運営がうまい」(83.8%)上に「世間の常識がわかっている」(81.6%)教師を保護者は求めていると、教師は思っている。さらに、「生徒が気楽に雑談できる」(70.3%)と共に、「大学入試の難問を鮮やかに解く」(65.1%)受験指導能力や「教科書より高いレベルの授業ができる」(63.8%)能力なども期待している。しかし、「有名な大学を出ている」(41.2%)か否かは問われていないと思っている。つきつめると、授業のうまさと生徒の気持ちをは的確につかめる教師を求め

ているといえよう。

保護者が期待しているであろうと思う教師像は、勤務する学校では教師自身もそうあるべきだろうと思っていることを意味している。保護者の期待度の予測は、とりも直さず教師の意識と考えるても大差あるまい。

性別では、女性教師の方が生徒とのかかわりを重視している。年齢別では、25歳以下の新人層が「生徒に厳しく校則を守らせる」べきだ(65.2%)と強く思っていることがわかる。進学率別では、30%未満の学校では「生徒が気楽に雑談できる」(76.7%)、「生徒に厳しく校則を守らせる」(58.3%)ことのできる教師に、強い期待感を感じていることがわかる。一方、「大学入試の難問を鮮やかに解く」「教科書より高いレベルの授業ができる」「有名な大学を出ている」の3項目では、明確に進学率が上がるのに正比例して強い期待感を

表4-5 教師が考えている保護者の期待度 × 性・年齢・進学率

(%)

	全体	性別		年齢別					進学率別			
		男性	女性	25歳以下	26~30歳	31~40歳	41~50歳	51~60歳	30%未満	30~79%	80~89%	90%以上
わかりやすい授業ができる	95.2	95.9 >	92.5	86.9	94.8	98.2	95.7	90.3	88.3 <	95.0 <	97.4	97.2
クラスの運営がうまい	83.8	83.5 <	84.8	82.6	81.1	86.8	83.8	79.0	78.0 <	84.0 <	84.4 <	84.8
世間の常識がわかっている	81.6	81.2 <	82.9	82.6	86.3	84.5	82.7	72.3	71.4 <<	81.5 <	87.9	82.3
生徒が気楽に雑談できる	70.3	69.5 <	73.6	78.3	74.1	69.5	70.0	69.5	76.7 >	70.5	71.5 >	66.4
大学入試の難問を鮮やかに解く	65.1	65.1	65.2	60.9	60.4	69.5	64.5	61.0	31.7 <<	54.0 <<	71.6 <<	85.5
教科書より高いレベルの授業ができる	63.8	64.6 >	60.8	52.1	56.9	62.1	69.2	60.9	24.5 <<	52.9 <<	69.9 <<	86.5
生徒に厳しく校則を守らせる	51.7	51.2 <	53.5	65.2	52.4	51.8	48.0	54.5	58.3 >	54.2 >	53.5 >	45.6
有名な大学を出ている	41.2	40.0 <	46.2	52.2	41.3	41.3	39.0	42.9	20.1 <<	33.0 <<	45.7 <	54.2

「とても」+「わりと」そう思う割合
 ____ は各項目中の最大値 ___ は各項目中の最小値 10ポイント以上の差

意識していくことがわかる。どのような学校に勤務しているかによって保護者の期待の内容は違い、教師の意識も当然違うといえよう。

4) 教師・学校への要望

新教育課程の実施を来年度に迎えるに当たって、教師は教師や学校に、どのような期待を持っているのだろうか。この点を問うたものが表4-6である。

「もっと授業の準備や研修をする時間」(91.8%)や「もっとさまざまな研修を受ける機会」(83.2%)がほしいし、「教師同士で、もっと他の教師の授業を見る機会があった方がよい」(82.6%)という意見に、多くの教師が賛成していることがわかる。「教師は、学校以外の職場を経験した方が、知識や視野が広がる」(70.4%)とも思っている。なかなか、学校現場で教師同士で授業を見せ合う

機会が少ない現状を変えるべきだと考えている証拠である。教師自らも変革すべきだと思っている教師が多くいることを、この数値は示している。

そして、当然ながら生徒の意見・要望(68.4%)や保護者の意見・要望(64.7%)にももっと耳を傾けるべきだと思っている。

性別でみると、女性教師に研修の時間や機会を望む意見が多い。年齢別では20代の若手に自己変革への思いや生徒・保護者への対応に改善すべきだという思いが強いことがわかる。進学率別では、進学率の低い学校の教師の方が自己変革や生徒・保護者へ誠実に対応しようという思いが強い。50代や進学率90%以上の学校の教師には消極派、現状維持派が多いといえる。ベテラン層にこそ意識変革が強く求められている現状をはしくも示したデータとみることができる。

表4-6 教師・学校への期待度 × 性・年齢・進学率

(%)

	全体	性別		年齢別					進学率別			
		男性	女性	25歳以下	26~30歳	31~40歳	41~50歳	51~60歳	30%未満	30~79%	80~89%	90%以上
もっと授業の準備や研修をする時間がほしい	91.8	90.7 <	96.3	87.0 ---	89.6	<u>94.0</u>	92.4	88.3	93.3	91.5	<u>94.0</u>	90.5 ---
もっとさまざまな研修を受ける機会がほしい	83.2	81.0 <<	91.9	<u>86.9</u>	76.6 ---	85.7	84.4	77.9	<u>87.5</u>	83.9	87.0	79.8 ---
教師同士で、もっと他の教師の授業を見る機会があった方がよい	82.6	81.4 <	86.9	<u>95.7</u> >	87.9 >	86.1 >	80.6 >	<u>75.1</u>	<u>88.3</u>	80.5	86.1	80.3 ---
教師は、学校以外の職場を経験した方が、知識や視野が広がる	70.4	70.2 <	71.5	82.6	<u>86.2</u>	67.5	66.5 ---	74.4	<u>73.9</u>	70.8	71.6	68.5 ---
教師や学校は、もっと生徒の意見や要望に耳を傾けるべきだ	68.4	67.9 <	70.7	73.9	<u>82.8</u>	67.2	66.6 ---	67.8	67.5	<u>71.7</u>	67.2	66.7 ---
教師や学校は、もっと保護者の意見や要望に耳を傾けるべきだ	64.7	65.2 >	63.1	<u>73.9</u>	70.7	63.2	66.5	60.3 ---	65.0	<u>71.3</u>	61.2	59.7 ---

「とても」+「わりと」そう思う割合
 ___ は各項目中の最大値 --- は各項目中の最小値 10ポイント以上の差

3. 制度改革へ向けて

新制度導入に対して積極的賛成者の割合が少ないということは前述した通りだが、表4-7をみると、学力別クラス編成を強く肯定する者(20.4%)や民間人の校長への登用を「とても賛成」する者(11.4%)は、新制度導入への賛成の度合いが特に高いことがわかる。

逆に学力別クラス編成に賛成しない者(8.0%)や民間人の校長への登用を「とても反対」の者(15.3%)は、新制度に反対の度合いが特に高いのである。この層をも巻き込んだ制度改革がなされる必要があるのではないだろうか。

そのためには、少なくとも以下の視点が必要と思われる。

管理職と一般教員で構成される学校現場で、校内人事をどう作り上げるかは大事だと思う。

前述の1節の1)2)3)のデータを踏まえると管理職主導の校内人事から一般教員を加えて校内人事を共に作るという方向に進むべきではないだろうか。アメリカのような校長に大きな権限を与えるという方向ではなく、校長は調整役として下からの意見を汲み上げるという、従来の調整型管理職に帰るべきではないだろうか。

「ゆとり」教育は、教育を担当する教員自身にも保障すべきであろう。今年度から完全週5日制になったにもかかわらず、むしろ土曜日出勤の回数も増加して忙しくなったという実感が強い。週1研修もなくなってしまった。前述の2節の4)のデータからもゆとりと週1自主研修の機会をぜひとも認めるべきであろう。教員の意識変革が必要なことはもちろんだが、現場の意向を無視した制度改革は、改善につながらないと考えるのは筆者だけだろうか。

表4-7 新制度導入への賛否 × 学力別クラス編成・民間人の校長への登用

(%)

	全体	高校生ともなると、学力の差がひろくから学力別クラス編成をすべきだ				民間人の校長への登用				
		そう思う	どちらかという そう思う	どちらかという そうは 思わない	そうは 思わない	とても 賛成	やや 賛成	どちらとも いえない	やや 反対	とても 反対
スクールカウンセラーの配置	74.6	80.1	> 73.8	> 72.3	72.1	79.5	83.3	> 74.6	> 71.3	> 65.0
学校選択の自由の実施	52.6	69.0	52.6	> 42.9	> 38.3	72.7	> 65.4	46.1	46.7	> 42.4
学校運営連絡協議会制度の導入	34.7	44.1	> 36.7	25.7	> 23.3	61.4	46.0	30.8	> 28.2	16.6
教員の人事考課制度の採用	33.6	51.7	34.8	19.7	19.7	73.9	52.0	25.6	> 16.6	20.0
民間人の校長への登用	30.9	43.0	32.1	19.2	23.0					

「とても」+「やや」賛成の割合
10ポイント以上の差

第5章

進む教育改革と
それをとらえる教師の目

小原孝久

2002年4月より、「学校完全週5日制」(以下「学校5日制」)が始まった。またこれにともない、2002年度(高校では2003年度)から、新しい学習指導要領が実施された。

そもそも「学校5日制」は、世界的な流れの中で教師にも週休2日制が必要であるとする考え方や、学校も週5日制にして、子どもたちをもっと地域や家庭に返すべきであるという考え方を背景に進められてきた。そして「学校5日制」の開始にともなって、新しい学習指導要領では、教育内容を厳選して、子どもたちに「考える力」や「生きる力」をつけることのできる「ゆとり教育」が提唱されている。またそのねらいの一環として、小学校から高校まですべてにおいて、「自ら学び、自ら考える」能力を育てるための「総合的な学習の時間」が新設されることになった。

このような背景のもと、現在多くの教育改革が進められているが、そこにはさまざまな問題が生じている。「学校5日制」や教育内容3割削減の問題との関連から、「学力低下論争」が起きているのは周知の通りである。また高校現場では、学力低下論や教育委員会の要望、あるいは大学受験

を視野において、土曜日に補習等を行う動きなどもみられる。また「総合的な学習の時間」を実際どのように実施していくのか、また本当に「考える力」や「生きる力」を育むことができるかなどの問題もある。

このように「学校5日制」と並行して進められているさまざまな教育改革の流れの中で、高校教師たちは、教育改革や教育環境の変化をどのように受けとめているのか、本章ではその実態のいくつかを探ってみよう。

1 「学校完全週5日制」と「新カリキュラム」

1) 「学校完全週5日制」には賛成だが、
いくつかの不安も

まず、「学校5日制」に対する受けとめ方からみてみよう。表5-1によると、「学校完全週5日制の実施について」という問いに対し、賛成の回答は66.0%(「とても」34.4%+「やや」31.6%)で、高校教師たちはおおむねこの「学校5日制」に賛成していることがわかる。

しかし同時に、「学校5日制」にともなう不安や

表5-1 「学校完全週5日制」の賛否

	(%)			
	とても賛成	やや賛成	あまり賛成できない	ぜんぜん賛成できない
学校完全週5日制の実施	34.4	31.6	24.1	9.9
	66.0			

心配もみてとれる。次に表5 - 2をみてみよう。アンケートの結果によると、「学校完全週5日制により、教師の生活にゆとりが増える」という問いに対して、否定的な回答が72.0%あった（「あまりそう思わない」+「ぜんぜんそう思わない」）。本来教師の生活にもゆとりをもたらすはずの「学校5日制」が、そのようには受けとめられていないことがわかる。

また生徒や学校に対する心配をみてみると、「学校完全週5日制により、生徒の学力が低下する」という問いに対する肯定的な回答は72.9%（「とてもそう思う」+「わりとそう思う」）。「学校完全週5日制により、公立校と私立校の格差がますます広がる」という問いに対する肯定的な回答は83.6%に達した。

高校教師たちは、「学校5日制」にはおおむね賛成している。しかし、教師の生活に「ゆとり」が増えるとは感じていないし、また生徒の学力の

低下や、私立校との格差の拡大などについて心配しているのがわかる。

2) 土曜日のとらえ方

次に、高校教師たちの土曜日のとらえ方をみてみよう。

表5 - 3によると、土曜日の補習授業に関するアンケートの結果は、「受験用の補習」についての賛成の合計は45.1%（「とても」10.9%+「やや」34.2%）で、また「一般教養的な補習」についても賛成の合計は29.6%（「とても」4.9%+「やや」24.7%）であった。高校教師たちは土曜日の補習についてあまり積極的には考えておらず、「受験用の補習」はやむを得ずの賛成ということも考えられる。

また土曜日の特別活動（学校行事、クラブ活動など）についても、賛成の合計は55.6%（「とても」12.6%+「やや」43.0%）であった。土曜日

表5 - 2 「学校完全週5日制」について

	とても そう思う	わりと そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
学校完全週5日制により、 教師の生活にゆとりが増える	3.9	24.1	46.8	25.2
	72.0			
学校完全週5日制により、 生徒の学力が低下する	30.4	42.5	24.5	2.6
	72.9			
学校完全週5日制により、 公立校と私立校の格差が ますます広がる	43.2	40.4	14.7	1.7
	83.6			

表5 - 3 土曜日の使い方について

	とても 賛成	やや 賛成	あまり 賛成できない	ぜんぜん 賛成できない
土曜日の補習授業 （受験用）	10.9	34.2	33.5	21.4
	45.1			
土曜日の補習授業 （一般教養的なもの）	4.9	24.7	43.7	26.7
	29.6			
土曜日の特別活動 （学校行事、クラブ活動など）	12.6	43.0	31.6	12.9
	55.6			

の部活動などに対しても、思ったほど賛成は多くない。

総じて、高校教師たちは土曜日の使い方に関して、学校での活動についてあまり積極的ではないことがわかる。教師たちは、生徒たちが土曜日を学校外で過ごすことを望んでいるのではないだろうか。

3) 男性教師と女性教師の違い

「学校5日制」や土曜日のとらえ方については、男性教師と女性教師の間に多少の違いがみられた。

まず、表5-4でわかるように、「学校完全週5日制の実施」に対する賛成の合計(「とても」+「やや」)は、男性教師64.4%に対して女性教師は72.3%で、女性教師の方が8ポイントほど賛成が多い。また表5-5によると、「教師の生活にゆとりが増える」「生徒の生活にゆとりが

増える」「生徒の週末が多様になる」など、「学校5日制」の効果について、男性教師に比べて女性教師の方が肯定的な回答が4ポイントから6ポイント低く、女性教師の方が「学校5日制」に対して厳しい見方をしているのがわかる。

また土曜日の使い方についても、表5-4によると、生徒たちの学校での活動に関して、男性教師に比べて女性教師の方が、どの質問項目でも賛成の回答が10ポイント以上低く、女性教師の方が土曜日の生徒たちの学校での活動により消極的という結果がみられた。

男女平等観を前提としている教師の世界でも、より多くの家事や育児が女性教師の肩にかかるのであろうか。時間に追われ、あるいは家庭を犠牲にして仕事に追われる教師の実態や、「学校5日制」がその額面通りには行われないことへの教師の不安や疑問などが、女性教師の回答により鮮明に現れている結果ではないか。

表5-4 「学校完全週5日制」・土曜日の使い方 × 性

(%)

	全体	男性	女性
学校完全週5日制の実施	66.0	64.4	72.3
土曜日の補習授業(受験用)	45.1	47.4	36.5
土曜日の補習授業 (一般教養的なもの)	29.6	32.0	20.8
土曜日の特別活動 (学校行事、クラブ活動など)	55.6	58.2	45.6

「とても」+「やや」賛成の割合

表5-5 「学校完全週5日制」 × 性

(%)

	全体	男性	女性
学校完全週5日制により、 教師の生活にゆとりが増える	28.0	29.1	23.6
学校完全週5日制により、 生徒の生活にゆとりが増える	40.8	42.1	35.7
学校完全週5日制により、 生徒の週末が多様になる	65.4	66.2	61.9

「とても」+「わりと」そう思う割合

4) 期待されていない「新しい教育課程」

2003年度より開始される「新しい教育課程」についても、高校教師たちはあまり肯定的には受けとめていない模様である。

表5 - 6によると、「新しい教育課程では、生徒の基礎学力が低下する」という問いに対し、肯定的な回答が82.6%も占めており(「とてもそう思う」41.9% + 「わりとそう思う」40.7%)、教師たちは生徒の学力が低下することを大変心配しているのがわかる。

また、「新しい教育課程では、以前よりゆとりのある授業ができる」という問いに対する否定的な回答が91.5%、「新しい教育課程では、落ちこぼれる生徒が以前より減る」という問いに対する否定的な回答が89.7%など、文部科学省が「新学習指導要領」で目指しているとする「ゆとり」の増加や、「落ちこぼれ」の減少について、高校教師たちは大変懐疑的である。

以上、「学校5日制」や「新しい教育課程」についての高校教師たちの受けとめ方を概観してきた。そこからは、「学校5日制」には賛成であるが、「土曜日問題」「学力低下」への不安、「ゆとり」の減少など、さまざまな問題に直面している高校教師像が見えてくる。

2. 「総合的な学習の時間」と「情報」

1) 「総合的な学習の時間」に対しては否定的

高校で2003年4月から実施される新しい学習指導要領の目玉の1つが、「総合的な学習の時間」という新しい教科の設置であり、また「情報」という教科も新設される。高校教師たちは、これらの新しい教科に対し、どのような考え方を持っているのだろうか。

表5 - 7によると、「『総合的な学習の時間』は、生徒が興味関心を持つ」という問いに対する否定

表5 - 6 新しい教育課程について

	とても そう思う	わりと そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
新しい教育課程では、生徒の 基礎学力が低下する	41.9	40.7	16.0	1.4
	82.6			
新しい教育課程では、以前より ゆとりのある授業ができる	0.7	7.8	52.7	38.8
			91.5	
新しい教育課程では、落ちこ ぼれる生徒が以前より減る	1.6	8.7	57.0	32.7
			89.7	

的な回答が63.0%（「あまりそう思わない」＋「ぜんぜんそう思わない」）、「『総合的な学習の時間』は、生徒の個性を伸ばせる」という問いに対する否定的な回答は64.6%で、「総合的な学習の時間」のねらいや効果に対して否定的な考え方の多いことがわかった。また、「『総合的な学習の時間』は、実際どのようにやったらよいかわからない」に対する肯定的な回答は69.7%あり（「とてもそう思う」＋「わりとそう思う」）教科の具体的な内容がつかみきれないためか、教師たちが新しい教科の対応にかなり心配や不安を持っていることもわかった。

2)「情報」に対しては肯定的

一方、「情報」に対しては、高校教師たちは「総合的な学習の時間」とは違って、肯定的な見方をしている。

同じく表5-7によると、「『情報』の教科の新

設は、今の時代に必要である」という問いに対する肯定的な回答は67.6%あり、また「『情報』は、生徒が興味関心を持つ」とに対する肯定的な回答も77.1%で、「情報」のねらいや生徒の興味関心度について肯定的に考えている。「情報」に対しては、時代のニーズが明らかで、また科目の内容もわかりやすいためか、教師たちも積極的にとらえているようである。

ただ、「情報」に対するこれらの肯定的な回答も、「とてもそう思う」という強い回答は15%程度でそれほど高くない。ほとんどの高校でまだ実際に開始されていない今の段階で、教師たちの間にさまざまな不安や迷いがあることがうかがえる。

さらに、「『総合的な学習の時間』や『情報』は教師への負担が大きい」という問いに対しては、90.4%もの教師が肯定的な回答をしており、「総合的な学習の時間」にしても「情報」にしても、教科に対する負担感が強くあることもわかった。

表5-7 「総合的な学習の時間」「情報」という新しい教科について

(%)

	とても そう思う	わりと そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
「総合的な学習の時間」は、生徒が興味関心を持つ	4.8	32.2	52.3	10.7
			63.0	
「総合的な学習の時間」は、生徒に自ら考えさせる力をつける	8.1	35.9	44.3	11.7
			56.0	
「総合的な学習の時間」は、生徒の個性を伸ばせる	5.4	30.0	50.5	14.1
			64.6	
「総合的な学習の時間」は、実際どのようにやったらよいかわからない	21.4	48.3	25.7	4.5
	69.7			
「情報」の教科の新設は、今の時代に必要である	16.6	51.0	26.0	6.4
	67.6			
「情報」は、生徒が興味関心を持つ	14.9	62.2	20.0	2.9
	77.1			
「総合的な学習の時間」や「情報」は教師への負担が大きい	46.4	44.0	8.7	0.9
	90.4			

3) 若い世代は積極的？

ところで1)の考察では、「総合的な学習の時間」に対して、高校教師たちが否定的なとらえ方をしていることを指摘した。しかし、年齢とのクロス集計をみてみると、若い世代の教師たちの受けとめ方はそれほど否定的なものではないことがわかる。

表5-8は、「総合的な学習の時間」についての考え方について、肯定的な回答の合計（「とてもそう思う」+「わりとそう思う」）を年齢別にみたものである。「生徒の興味関心」「生徒の自ら考える力」「生徒の個性の伸長」などを尋ねたどの質問項目に対しても、20歳代では30歳代以上に比べて、肯定的な回答が単純平均で約20ポイントも多い。20歳代の教師が他の世代の教師に比べて、かなり大きな差で「総合的な学習の時間」を肯定的に受けとめていることがわかる。

「総合的な学習の時間」に関するこの年代による差異については、若い教師の柔軟性や積極性、中高年代の教師の忙しさや現実的な見方などさまざまな要因が推測されよう。そのような中、若い世代の教師が、新しい学習指導要領の目玉の1つである「総合的な学習の時間」に、生徒自身の「考える力」や「問題解決能力」の育成など、積極的な可能性を見いだそうとしていると解釈できないであろうか。

3. 新しい制度への対応

1) 生徒の少数指導がかなり望まれている

2002年度からの新しい学習指導要領の実施と並行して、文部科学省ではさまざまな新しい試みを提案している。図5-1は、「新しい制度や教科」について、高校教師たちの支持の多い順に並べて図示したものである。

図からわかるように、習熟度別クラス編成：賛成76.4%（「とても」20.3%・「やや」56.1%）
 ティーム・ティーチングでの教科指導：賛成73.5%（「とても」17.1%・「やや」56.4%）
 選択教科の拡大：賛成61.7%（「とても」12.2%・「やや」49.5%）
 「情報」の実施：賛成57.3%（「とても」12.3%・「やや」45.0%）の順で賛成が多かった。クラスの生徒数の削減も学校現場での強い要望であるが、生徒の少数指導は、現場ではかなり望まれていることがうかがえる。

2) 「中高一貫教育」はどちらともいえず、

「総合的な学習の時間」には反対が多い
 同じく図5-1によると、「中高一貫教育の実施」に対する賛成は51.6%（「とても」11.1%・「やや」40.5%）、「『総合的な学習の時間』の実施」に対する賛成は34.7%（「とても」6.0%・「やや」

表5-8 「総合的な学習の時間」について × 年齢

		(%)					
	全体	25歳以下	26～30歳	31～40歳	41～50歳	51～60歳	
「総合的な学習の時間」は、 生徒が興味関心を持つ	37.0	60.9	50.0	>	38.0	34.0	32.2
		55.5			34.7		
「総合的な学習の時間」は、生徒 に自ら考えさせる力をつける	44.0	69.5	58.6	>	43.4	39.3	43.4
		64.1			42.0		
「総合的な学習の時間」は、 生徒の個性を伸ばせる	35.4	60.8	46.6	>	35.0	30.7	35.7
		53.7			33.8		

「とても」+「わりと」そう思う割合
 _____ は単純平均

28.7%)であった。中高一貫教育については、まだその内実がよくわからないこともあるのか賛否は二分された。また、「総合的な学習の時間」については、ここでも反対の意見がかなり多かった。

3) 20歳代の教師の肯定的な受けとめ方

表5-9は「新しい制度や教科」についての考え方に関して、賛成の回答の合計(「とても」+「やや」)を年齢別にみたものである。

この表から、「『総合的な学習の時間』の実施」への賛成が、20歳代の教師では、他の世代の教師に比べて21ポイントも多いことがわかる(単純平均による比較)。また、「選択教科の拡大」「チーム・ティーチングでの教科指導」「習熟度別クラス編成」「中高一貫教育」などの新しい制度についても、20歳代の教師は、他の世代の教師に比べてかなり肯定的にとらえていることもわかる。やはり、若い教師の柔軟性や積極性の現れであろうか。

図5-1 新しい制度や教科について

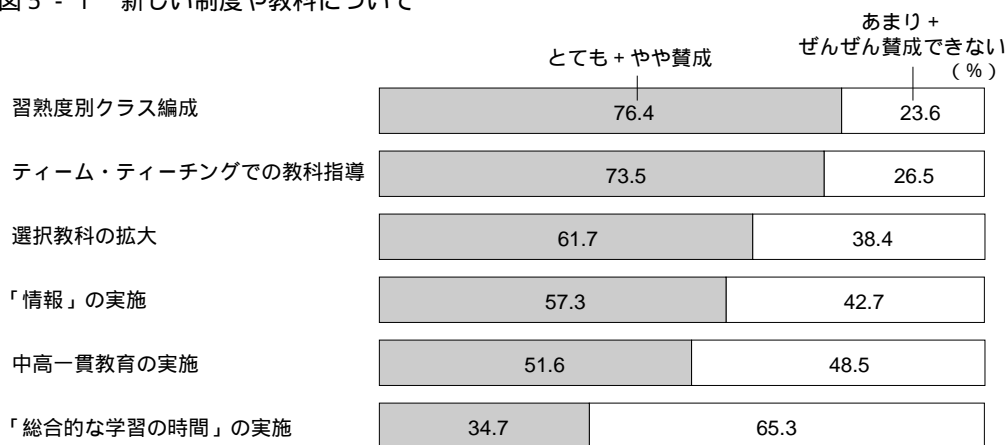


表5-9 新しい制度や教科について × 年齢

	全体 (%)	25歳以下	26~30歳	31~40歳	41~50歳	51~60歳
習熟度別クラス編成	76.4	82.6	82.7	76.2	77.2	72.6
		82.7		75.3		
チーム・ティーチングでの教科指導	73.5	100.0	84.5	77.8	70.4	62.2
		92.3		70.1		
選択教科の拡大	61.7	73.9	74.1	60.3	58.5	62.5
		74.0		60.4		
「情報」の実施	57.3	73.9	58.6	57.8	54.7	58.1
		66.3		56.9		
中高一貫教育の実施	51.6	60.8	67.2	55.4	46.2	46.5
		64.0		49.4		
「総合的な学習の時間」の実施	34.7	56.5	51.7	34.9	28.5	35.9
		54.1		33.1		

「とても」+「やや」賛成の割合
 _____ は単純平均

4. 教育環境の変化とその未来

以上みてきたように、2002年度からの「学校5日制」の導入、2003年度からの高校における「新学習指導要領」の開始を軸に、学校現場は大きく変わろうとしている。そのような中、高校教師たちは、10年後の高校を取り巻く教育環境をどのように想像しているのでしょうか。

図5-2は、10年後の教育環境がどのように変わっていると思うかを尋ねたものを一覧にしたものである。ここでは15の質問項目を次の6つの分野に分類して、高校教師たちが予想する高校の未来像を描いてみた。(ここで、「増す」は「とても増す」+「わりと増す」を、「減る」は「わりと

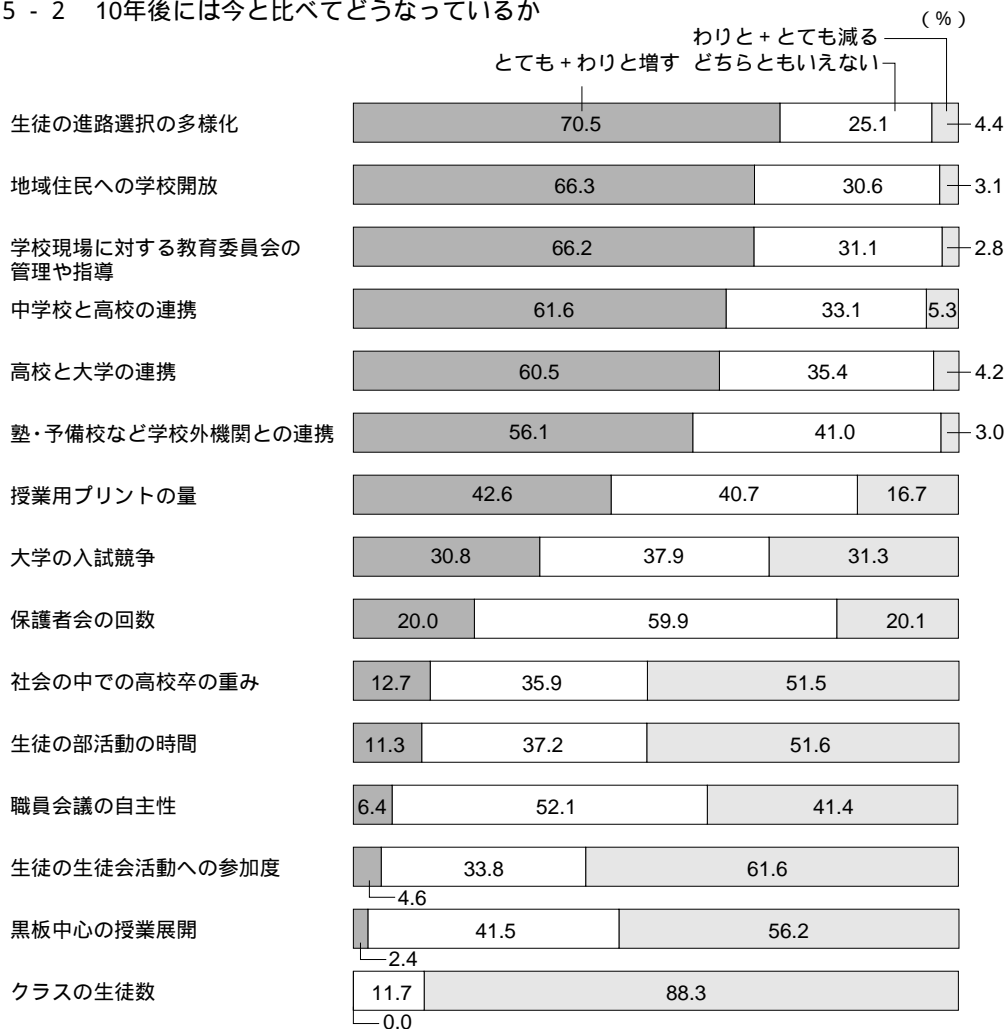
減る」+「とても減る」を表している)

1. 高校全体：10年後くらいには、「社会の中での高校卒の重み」〔 〕は、さらに軽くなりそうである(減る51.5% > 増す12.7%)。一方、「クラスの生徒数」〔 〕は、かなり減ることが予測されている(減る88.3% > 増す0.0%)。

2. 授業：「黒板中心の授業展開」〔 〕が減ることが予測されている(減る56.2% > 増す2.4%)。この黒板中心の授業に変わるものとしては、設問19の、「現在、高校でどのような授業や教え方が大事だとお考えですか」の回答が参考になると思われる〔P.55参照〕。

3. 特別活動：「生徒の部活動の時間」〔 〕はかなり減ると予測されている(減る51.6% > 増す11.3%)。この結果は、部活動を中心にさまざま

図5-2 10年後には今と比べてどうなっているか



まなものを大きく抱え込みすぎている現在の高校の現場からの声の反映といえるのではないか。

4. まわりとの連携：学校外については、中学校〔 〕、大学〔 〕ばかりか、塾や予備校〔 〕などとの連携までもが大きく増すと予測されている（増す56.1～61.6%＞減る3.0～5.3%）。「地域住民への学校開放」〔 〕も現在より進むと考えられており、「地域や社会に開かれた高校」というイメージはさらに進展しそうである。

5. 進路：「生徒の進路選択の多様化」〔 〕は、今後もさらに増すと考えられている（増す70.5%＞減る4.4%）。一方、「大学の入試競争」〔 〕については、その増減の予測は拮抗している（減る31.3%＞増す30.8%）。これは、受験競争は簡単には緩和されないのではないかという、高校現場の本音を表している結果ではないだろうか。

6. 学校管理：「学校現場に対する教育委員会の管理や指導」〔 〕はかなり強まると考えられており、一方、「職員会議の自主性」〔 〕は減少すると考えられている。このような管理や指導の強化が、学校現場に何をもたらししていくのであろうか。

前にみてきたように、高校教師たちは、「学校5日制」の影響や、「新学習指導要領」の内容を、否定的に受けとめている傾向がみられた。しかし、教師たちが描く10年後の未来像を分析してみると、教師たちは、高校現場が大きく変化しつつあることをも強く実感としているのがわかる。

5. 考察とまとめ

この章では、「学校5日制」の実施やそれにとりもなう教育改革などを、現場の高校教師たちがどのように受けとめているかを考察してきた。そこからわかることは、「学校5日制」には賛成であるが、実際のその運用、新しい教育課程、新しい制度などについて、多くの問題や不安を感じている教師たちの姿であった。なぜそのような問題や不安が生じているのか、最後に若干の考察を行ってみたい。

現在進められている教育改革の柱は、「学校5日制」と「ゆとり教育」の提唱であろう。前者の「学校5日制」は、多くの先進国の例からみても1つの必然的な方向といえよう。また後者の「ゆとり教育」も、ずっと言われ続けてきた「受験競争の弊害」「知識偏重教育」「詰め込み教育」「画

一的教育」などへの反省から生まれてきたものである。それにもかかわらず、現場の教師たちが多くの問題や不安を感じているとするなら、「学校5日制」の進展や、「ゆとり教育」の実現を阻んでいるものとは、いったい何であろうか。

まずその要因の1つとして、最近叫ばれている「学力低下論」がある。学力低下についてはいろいろな実証例も示されているが、他方で、学力の低下をはっきり示すデータはないともいわれている。また、勉強や学力の中身自体、高度経済成長期の知識を教え込むことが中心の勉強から、子どもたちが自ら考え、学んでいけるような教育も必要であると主張されている。そうであるならば、簡単に「学力低下論」に振り回されることなく、「学力」の実態やあるべき形を考えながら、「学校5日制」やこれからの教育改革をとらえていくべきであろう。

次に「学校5日制」や教育改革を阻む要因の2つ目として、受験や競争の問題があげられる。周知のように「学校5日制」は私立学校を拘束するものではなく、半数近くの私立高校では「学校5日制」が実施されていない。また近年緩和の方向にあるといわれる大学受験にしても、エリート校を中心に、その競争はまだまだ続きそうである。そのような状況の中で「学校5日制」や「ゆとり教育」のみを進めようとするれば、公立高校の教師たちがさまざまな問題や不安に悩まされるのは当然のことであろう。私立校との格差の是正や受験競争の緩和も、同時に解決されていくべき問題であろう。

さらに「学校5日制」や教育改革を阻む要因の3つ目として、制度的保障の不備があげられよう。毎週土曜日が休みになるのであれば、当然家庭、地域、社会などで、さまざまな形の受け入れ態勢が用意されるべきであろう。その不備のツケを学校や教師のみに求めるとするならば、それはあるべき形ではない。また、たとえば「総合的な学習の時間」についても、人的、物的な整備はほとんどなく、ただ現場の教師に工夫を求めているという側面もみられる。新しい試みには、当然それなりの人的、制度的な整備や保障が必要なはずである。

2002年4月より始まった「学校5日制」、それにとりもなう進められているさまざまな教育改革。その流れの中で、高校教師たちが前向きに「ゆとり教育」を目指せることを願ってやまない。

●まどめに代えて

教師調査のデータを読んで

深谷昌志

大学教員の意識は変わった

大学の仲間たちと、大学教員気質の変わり方を語る機会が多い。10年前と比べると、大学の雰囲気が変わり、教員の気持ちも大きく変わりつつある。

国立大学の場合、専任講師なら助教授なりに採用されると、研究者としての一生が保証されたように思えた。長く苦しいオーバードクター生活が終わり、「先生」の身分になれた。相撲の世界なら十両入りして関取になれた。プロ野球の世界なら一軍に呼ばれたときの喜び以上かもしれない。特に問題がなければ定年までこの大学に席を置ける。生活の心配がなくなったのだから、これからがんばるぞ。そんな明るい思いで、キャンパスを眺める。

残念ながら、今の若手は、そうした希望に満ちた目でキャンパスを見つめていない。10年後、うちの学部はどうなるのだろう。A大学との合併話はどうなるのか。ベテランの教授は定年まで残り少ないからよいけれど、われわれの将来は不安だ。

少子化を背景にした受験生の減少をベースに、定員割れを起こす学科が増える。受験生がムードで受験するので、学科によって明暗が分かれる。国立大学の独立法人化が進展して、大学間の合併話が具体化する。大学教育についての外部評価も始まるというわけで、個々の教員が、自分のものとして大学のあり方を考えるようになった。学生の中に飛び込んで、学生の声を講義に生かそうとする教員もいれば、研究に打ち込んで、その姿勢を学生に見せたいという教員の姿もある。

年上の教員として、若い教員を気の毒だと思う。せめて、30代くらいは研究に打ち込める環境を作ってあげたいとも考える。そうした反面、なるようにしかないと腹をくくり、目先のことに一喜一憂しないで、腰を落着けたらとも思う。

教師は疲れている

大学の雰囲気が変わっているだけに、高校の教師を対象に今回の調査を実施するにあたって、変化の程度や方向を知りたいと思った。

結果の中で目についたのは、教師たちの疲れきっている姿だった。2002年調査では、1983年調査と比較して、「体力のいる仕事だ」が増え、「時間にゆとりのある仕事だ」が減少している。

実際に、現在の体調について、「放課後になると、気分がはればれとする」が39.4%、「朝なかなか起きられない」が36.6%、「できれば学校を休みたいと思う」は30.2%に達する。起きるのがつらいという教師が4割、不登校気味の教師が3割というのは、どう考えても正常でない。

今回の調査の回収率は34.9%だった。こうした調査の場合、アンケートに答えてくれるのは意欲的な教師である確率が高い。そうした教師でも疲れきっている教師が多い。アンケートに答えてくれなかった教師の回答を含めると、心身ともに不調ぎみの教師はもっと増えるのではないが。

高校教師といっても、勤務先の学校によって条件が異なる。しかし、長い間、大学進学を中心とした高校の教師は、専門教科についての見識を深め、受験内容を熟知していれば、職責を果たすことができた。

そうした延長線上に、高校の社会科の教師に考古学や地方史の専門家がいたり、英語の教師が英文学の優れた翻訳家だったりする姿が浮かんでくる。高校教師が教養人であった時代である。

しかし、大学入試が緩やかになり、現在では、特定の大学入学を除けば、大学入学は広い門になりつつある。特別に受験指導をしなくても、入学できる大学が増えた。

よくも悪くも、大学入試は高校教育の錦の御旗だった。入試のために全力を尽くすのが生徒の使命で、そうしたゴールへ道案内してくれるのがよい教師だった。しかし、学校全体で全力をあげて

入試に取り組んでいるのは、ほんの一握りの進学校であろう。入試といっても、燃え上がらない生徒が多い。受験指導の専門家だけに、受験に燃えない生徒には手を焼くのではないか。

同じような状況は専門高校の教師についてもあてはまる。商業や工業の教師は、専門的な技能の指導に情熱を燃やし、そうした技能を習得した生徒は専門高校を卒業して、社会に巣立っていった。しかし、現在のような高度な情報化社会になると、専門高校を卒業して就職できる場は狭まっている。専門高校は就職を保証できなくなりつつある。

長い間、進学と就職は高校教育が社会の中で果たしてきた機能だった。しかし、この2つの機能が揺らいでいる。それだけに、高校教師は教師としての目的を失いかけているのではないか。

10代後半の心を支える

高校改革について、高校教師の反応は鈍いという印象を受けた。学力低下が心配だが、民間人校長の登用や学校運営連絡協議会などの改革に否定的な反応が多かった。このところの改革はあまりの多方面の手直しを急速に進めているので、現場として混乱し、困惑することも多かろう。したが

って、改革に消極的なのはよいが、21世紀の高校はどういう役割を取るべきなのか。そうした危機感が薄い印象を受けた。冒頭でふれた大学の状況のように情報に右往左往し、混乱するのも困りものだが、傍観するだけでは処方箋は浮かんでこない。

今回の結果では、1983年調査と比べ、「クラブ活動を熱心に指導している」や「生徒の年賀状にはまめに返事を書いている」などが目立った。生徒指導の領域に気をくばっている教師が多い。

高校に、生徒は15歳から18歳までの3年間在籍する。10代後半は自分を見つめ、自分の生き方を考える時期であろう。生涯学習の時代になると、高校を卒業してすぐに進学する必要はない。どこかに勤め、自分の個性を見つけてから大学に進んでもよい。しかし、これまで、進路指導はなされていても、生き方を踏まえた指導は少なかったように思う。

やや長期的な見通しの中では、進学とか就職とかというより、自分探しの場として高校は位置づくのではないか。そうしたとき、教師として何ができるのか。そうした観点で教師の仕事を考えてほしいと思った。



アンケートのお願い

このアンケートは高校にお勤めの先生方のご意見をお聞きする目的で作成されたものです。

封をして提出いただいたアンケート用紙は統計的に処理いたします。したがって、お書きいただいた内容で先生方にご迷惑をおかけすることはありませんので、自由にお気持ちをお書きくださるようお願いいたします。

なお、今回のアンケート集計結果を分析した内容は、2002年12月に「モノグラフ・高校生 VOL.67」として刊行する予定です。

締め切りは、3月31日（日）です。

高校教育研究会

東京成徳短期大学教授 深谷 昌志

上智大学教授 武内 清

明治学院大学教授 望月重信

《回答のしかた》特にことわりのない場合は、あてはまる数字に1つだけ をつけてください。

資料 調査票見本および集計結果

ご自身のことについてお尋ねします。

単位：パーセント

1 ご自身のことや勤務校についてお尋ねします。

1) 性別..... (1 . 男性 2 . 女性)
79.2 20.8

2) 年齢..... () 歳 25歳以下 26～30歳 31～40歳 41～50歳 51～60歳 61歳以上
3.0 7.5 34.4 35.8 19.0 0.4

3) 担当教科 (複数の場合は、主なもの1つ)

1 . 英語 20.7 2 . 国語 16.7 3 . 数学 18.5 4 . 地歴・公民 15.9
5 . 理科 11.5 6 . 芸術 2.7 7 . 家庭 2.5 8 . 体育 8.4
9 . その他 (具体的に) 3.2

4) 出身学校 (大学)

1 . 教育系大学 (国公立) 2 . 教育系大学 (私立) 3 . 教育系以外の大学 (国公立)
20.2 6.1 30.9
4 . 教育系以外の大学 (私立) 5 . 大学院 6 . 短期大学
35.7 6.1 0.3
7 . その他 (具体的に) 0.9

5) 教職の経験年数..... () 年 5年以下 6～10年 11～20年 21～30年 31年以上
9.6 10.4 41.3 27.0 11.7

6) 現在勤務している学校は、何校目になりますか。

1校目 2校目 3校目 4校目以上
13.2 20.2 28.4 38.2

7) 現在勤務している学校は、赴任して何年目になりますか。

() 年目 1年目 2年目 3年目 4年目 5年目 6年目以上
13.2 12.9 10.8 10.6 9.6 42.9

8) 現在勤務している学校の課程は、次のどれにあたりますか。

1 . 全日制 99.6 2 . 定時制 0.4 3 . 通信制 0.0

9) 現在勤務している学校の学科は、次のどれにあたりますか。

1 . 普通科 71.2 2 . 総合学科 5.6 3 . 工業科 0.4 4 . 商業科 0.1
5 . 工・商業科以外の専門学科 0.0 6 . 普通科と専門学科の併設 22.1 7 . 定時制 0.1
8 . その他 (具体的に) 0.5

資料 調査票見本および集計結果

□3 日頃、次のことをどれくらいしていますか。

	とても している	かなり している	半分 半分	あまり していない	まったく していない
1. 授業では指導案や講義ノートを作っている.....	14.2	21.1	22.6	31.8	10.3
2. 生徒の年賀状にはまめに返事を書いている.....	51.4	28.7	6.9	7.5	5.5
3. 生徒の質問や相談には親身に答えている.....	44.4	48.6	6.5	0.5	0.0
4. タバコを吸っている生徒を見かけると厳しく 注意する.....	51.2	35.5	10.6	1.7	1.0
5. 担当する教科の専門書にはよく目を通している...	18.1	34.1	33.2	13.4	1.2
6. 37度くらいの熱でも無理して出勤している.....	27.7	38.3	24.1	7.9	2.0
7. 生徒に人気のあるマンガや音楽に接するように している.....	3.9	12.4	27.3	40.5	15.9
8. クラブ活動を熱心に指導している.....	18.7	18.3	28.8	26.3	7.9

□4 現在勤務している学校には、次のような生徒がどれくらいいると思いますか。

	ほぼ 全員	7割 くらい	半分 くらい	3分の1 くらい	ほとんど いない
1. 規則を守る生徒.....	14.3	62.5	18.7	4.3	0.3
2. 退学する生徒.....	0.0	0.0	0.3	3.9	95.8
3. 授業の予習復習をする生徒.....	2.9	21.4	32.7	30.1	12.9
4. 部活動に入って活動する生徒.....	3.9	36.7	41.4	17.2	0.8
5. 自分の意見をみんなの前で発言できる生徒.....	1.8	15.2	29.2	40.0	13.8
6. 授業中、熱心に授業を受ける生徒.....	15.2	46.6	27.1	10.7	0.4
7. 自分の進路を具体的に決めている生徒.....	3.8	28.3	44.7	21.9	1.4
8. 友だちが多い生徒.....	5.6	47.0	39.6	7.8	0.0
9. 学校行事に積極的に参加する生徒.....	11.6	46.2	33.2	8.6	0.5

□5 部活動の顧問をしていますか。

1. 運動部の主顧問をしている 36.6
2. 運動部の副顧問をしている 22.8
3. 文化部の主顧問をしている 21.4
4. 文化部の副顧問をしている 6.4
5. 運動部と文化部の顧問をしている 6.0
6. 顧問をしていない 6.8

- 6 1か月のうち、第2・4土曜日や日曜日、祝日などに、部活動や仕事のために平均してどれくらい学校に来ていますか。

5日以上	4日	3日	2日	1日	0日
21.1	8.7	13.3	16.1	22.6	18.1

. 教師という職業についての意見をお尋ねします。

- 7 「高校の教師」の仕事をどのように評価していますか。

	とても そう思う	まあ そう思う	なんとも いえない	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
1. 社会的に尊敬される仕事だ.....	5.9	41.2	36.3	14.0	2.6
2. 経済的に恵まれた仕事だ.....	4.0	36.0	32.9	21.2	6.0
3. 精神的に気苦労の多い仕事だ.....	43.7	45.8	7.9	2.2	0.4
4. 時間にゆとりのある仕事だ.....	1.9	10.4	20.3	36.8	30.6
5. 専門に関して高度の知識が必要な仕事だ.....	30.9	53.8	10.4	4.8	0.1
6. 体力のいる仕事だ.....	35.6	49.9	10.5	3.6	0.4
7. 生徒と接する喜びのある仕事だ.....	49.5	42.2	6.0	1.9	0.4

- 8 高校教育について、次のような考え方がありますが、どう思いますか。

	そう思う	どちらかという そう思う	どちらかという そうは思わない	そうは 思わない
1. 高校生ともなると、学力の差がひらくから 学力別クラス編成をすべきだ.....	20.4	48.6	23.1	8.0
2. 高校生をおとな扱いし、髪型や服装を もっと自由にすべきだ.....	6.6	22.6	42.6	28.2
3. テストの結果などを公表し、競争意識を つけさせるべきだ.....	7.8	37.0	39.6	15.6
4. 文化祭や運動会などを、もっと積極的に 奨励すべきだ.....	31.6	49.1	16.6	2.7
5. 受験勉強は苦しみに耐える忍耐力が 身につく.....	21.9	52.6	19.5	6.0
6. 受験のための勉強は、むしろ創造力を 育てる上で害になる.....	4.7	23.4	48.9	23.0
7. 受験勉強でついた能力は、大学での 勉学の基礎となる.....	28.8	53.8	14.3	3.1

資料 調査票見本および集計結果

9 職員室のあなたの席の周囲で日頃、次のような事柄はどのくらい話題になっていますか。

	よく 話題になる	少し 話題になる	ほとんど 話題にならない
1. 教科の進め方や指導技術など.....	46.2	46.4	7.4
2. HRや教科で受け持ちの生徒のこと.....	74.1	24.2	1.7
3. 部活動やその指導のこと.....	27.5	53.9	18.5
4. 教師間の人間関係やうわさなど.....	18.0	48.0	34.0
5. 最近読んだ本や雑誌のこと.....	9.0	60.2	30.8
6. 社会的課題や政治問題について.....	23.9	61.6	14.4
7. 歌番組や映画・音楽などのこと.....	3.0	37.7	59.3
8. 趣味やスポーツなどのこと.....	13.5	61.6	24.8
9. 家族や子どもの育児や教育などのこと.....	12.9	61.7	25.4
10. 校長や上司などのこと.....	21.4	60.2	18.5
11. 教育行政や教育政策について.....	20.2	60.2	19.7
12. 新学習指導要領やカリキュラムについて.....	32.6	56.9	10.5

10 ふだん、次のようなことを感じますか。

	いつも 感じる	ときどき 感じる	あまり 感じない	まったく 感じない
1. 朝なかなか起きられない.....	8.0	28.6	42.2	21.1
2. 朝起きると学校の仕事が気になりだす.....	17.1	42.1	32.4	8.4
3. 朝起きると生徒の姿がちらつく.....	6.7	24.1	51.3	17.9
4. 出勤時刻になると気が重くなる.....	3.8	18.5	44.6	33.2
5. できれば学校を休みたいと思う.....	5.8	24.4	39.8	30.1
6. 通勤途中でどこか遠いところに逃げていきたい.....	2.1	9.3	32.4	56.2
7. できれば生徒と顔を合わせないで学校に行きたい... ..	4.4	13.2	37.2	45.2
8. 職員室にいると同僚の視線が気になる.....	1.2	9.6	39.6	49.6
9. 職員室に近づかないようにしている.....	1.0	3.9	23.9	71.2
10. 授業を途中で投げ出したくなる.....	0.4	6.0	26.9	66.7
11. 放課後になると気分がはればれとする.....	8.9	30.5	37.7	22.8
12. 職員会議での自分の発言はほとんど無視されて いる.....	2.4	6.4	48.8	42.5
13. 職員会議などで発言したくても、自由に言えない 雰囲気がある.....	9.2	24.1	41.4	25.4

11 教職についてのお気持ちを教えてください。

とても積極的 だった	かなり積極的 だった	やや積極的 だった	ふつう くらい	やや消極的 だった	かなり消極的 だった	とても消極的 だった
27.8	30.8	18.3	15.7	4.7	1.7	1.0

12 今までに教職を辞めたいとお考えになったことがありますか。

1度も ない	1～2度 あった	数回 あった	いつもそう 思っている
37.5	32.7	23.5	6.4

・学校や生徒を取り巻く環境の変化についてお尋ねします。

13 現在勤務している学校の校務分掌の決め方は、次のどれにあたりますか。

1. 校長・教頭が主になって決める 59.9
2. 校長・教頭に主任層が加わって決める 21.0
3. 校長・教頭に教員から選ばれた複数の委員を加えて決める 9.2
4. 教員から選ばれた複数の委員を中心に決める 7.9
5. その他 2.0

14 13 の決め方は、数年前と比べてどうですか。

1. 変わっていない 87.4
2. 変わった 12.6 ——>()年くらい前から

1年くらい前から	2年くらい前から	3年くらい前から	4年くらい前から	5年以上前から
15.6	34.4	22.2	7.8	20.0

15 次の制度についてどのようにお考えですか。

	とても 賛成	やや 賛成	どちらとも いえない	やや 反対	とても 反対
1. スクールカウンセラーの配置.....	43.1	31.5	20.4	3.9	1.2
2. 学校運営連絡協議会制度の導入.....	11.3	23.4	50.4	10.2	4.7
3. 学校選択の自由の実施.....	20.8	31.8	38.0	7.6	1.8
4. 教員の人事考課制度の採用.....	12.8	20.8	44.7	11.3	10.4
5. 民間人の校長への登用.....	11.4	19.5	31.6	22.2	15.3

資料 調査票見本および集計結果

16 現在勤務している学校の保護者は、教師にどのような期待を持っているとお考えですか。

	とても そう思う	わりと そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
1. 生徒に厳しく校則を守らせる.....	5.1	46.6	44.8	3.5
2. 大学入試の難問を鮮やかに解く.....	21.0	44.1	31.1	3.8
3. わかりやすい授業ができる.....	55.6	39.6	4.5	0.3
4. 教科書より高いレベルの授業ができる.....	20.5	43.3	32.6	3.5
5. クラスの運営がうまい.....	26.8	57.0	14.9	1.3
6. 生徒が気楽に雑談できる.....	15.3	55.0	27.8	1.9
7. 有名な大学を出ている.....	6.2	35.0	48.6	10.1
8. 世間の常識がわかっている.....	25.1	56.5	17.3	1.2

・授業やカリキュラムの変化についてお尋ねします。

17 「総合的な学習の時間」「情報」という新しい教科について、どのようにお考えですか。

	とても そう思う	わりと そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
1. 「総合的な学習の時間」は、生徒が興味関心を持つ.....	4.8	32.2	52.3	10.7
2. 「総合的な学習の時間」は、生徒に自ら考えさせる力をつける.....	8.1	35.9	44.3	11.7
3. 「総合的な学習の時間」は、生徒の個性を伸ばせる.....	5.4	30.0	50.5	14.1
4. 「総合的な学習の時間」は、実際どのようにやったらよいかわからない.....	21.4	48.3	25.7	4.5
5. 「情報」の教科の新設は、今の時代に必要である ...	16.6	51.0	26.0	6.4
6. 「情報」は、生徒が興味関心を持つ	14.9	62.2	20.0	2.9
7. 「総合的な学習の時間」や「情報」は教師への負担が大きい.....	46.4	44.0	8.7	0.9

資料 調査票見本および集計結果

[18] 次のような制度についてどのようにお考えですか。

	とても 賛成	やや 賛成	あまり 賛成できない	ぜんぜん 賛成できない
1. 学校完全週5日制の実施.....	34.4	31.6	24.1	9.9
2. 土曜日の補習授業（受験用）.....	10.9	34.2	33.5	21.4
3. 土曜日の補習授業（一般教養的なもの）.....	4.9	24.7	43.7	26.7
4. 土曜日の特別活動（学校行事、クラブ活動など）...	12.6	43.0	31.6	12.9
5. 「総合的な学習の時間」の実施	6.0	28.7	43.5	21.8
6. 「情報」の実施	12.3	45.0	31.1	11.6
7. 選択教科の拡大.....	12.2	49.5	30.3	8.1
8. ティーム・ティーチングでの教科指導.....	17.1	56.4	21.6	4.9
9. 習熟度別クラス編成.....	20.3	56.1	18.9	4.7
10. 中高一貫教育の実施.....	11.1	40.5	39.5	9.0

[19] 現在、高校でどのような授業や教え方が大事だとお考えですか。

	とても 大事	やや 大事	あまり 大事でない	ぜんぜん 大事でない
1. 生徒が自分で調べたり研究したりする機会の 多い授業.....	29.9	63.1	6.1	0.9
2. 討論や発表を取り入れた授業.....	27.0	63.7	8.6	0.7
3. 視聴覚教材を取り入れた授業.....	18.6	60.8	20.0	0.6
4. コンピュータを取り入れた授業.....	12.5	56.3	28.0	3.3
5. 基礎的な力のつく授業.....	65.6	33.2	1.2	0.0
6. 受験により対応した授業.....	24.9	61.4	12.6	1.0
7. 職業に結びついた知識が得られる授業.....	15.8	57.5	25.7	1.0
8. 生徒が興味や関心を持てる授業.....	61.3	36.8	1.9	0.0
9. 生徒が楽しいと感じられる授業.....	46.8	44.6	8.1	0.5
10. 生徒との人間的なふれあいが感じられる授業.....	45.3	47.4	6.4	0.9

資料 調査票見本および集計結果

20 学校完全週5日制や新しい教育課程に関する次のような意見について、どのようにお考えですか。

	とても そう思う	わりと そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
1. 学校完全週5日制により、教師の生活にゆとりが増える.....	3.9	24.1	46.8	25.2
2. 学校完全週5日制により、生徒の生活にゆとりが増える.....	6.5	34.3	46.1	13.1
3. 学校完全週5日制により、生徒の週末が多様になる.....	18.6	46.8	27.9	6.8
4. 学校完全週5日制により、生徒の学力が低下する...30.4	30.4	42.5	24.5	2.6
5. 学校完全週5日制により、公立校と私立校の格差がますます広がる.....	43.2	40.4	14.7	1.7
6. 新しい教育課程では、生徒の基礎学力が低下する...41.9	41.9	40.7	16.0	1.4
7. 新しい教育課程では、以前よりゆとりのある授業ができる.....	0.7	7.8	52.7	38.8
8. 新しい教育課程では、落ちこぼれる生徒が以前より減る.....	1.6	8.7	57.0	32.7
9. 新しい教育課程では、授業時間数が減ってゆとりが生じる.....	0.4	6.9	51.8	40.9
10. 新しい教育課程では、選択授業を増やすべきだ.....	7.5	39.5	41.7	11.2

・ 変革期にある高校と教師についてお尋ねします。

21 教師や学校に対する次のような意見をどう思いますか。

	とても そう思う	わりと そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
1. もっと授業の準備や研修をする時間がほしい.....	49.8	42.0	7.3	0.9
2. もっとさまざまな研修を受ける機会がほしい.....	34.5	48.7	15.8	0.9
3. 教師同士で、もっと他の教師の授業を見る機会があった方がよい.....	27.3	55.3	16.5	0.9
4. 教師は、学校以外の職場を経験した方が、知識や視野が広がる.....	26.1	44.3	25.2	4.3
5. 教師や学校は、もっと生徒の意見や要望に耳を傾けるべきだ.....	13.9	54.5	29.4	2.2
6. 教師や学校は、もっと保護者の意見や要望に耳を傾けるべきだ.....	12.2	52.5	33.6	1.7

資料 調査票見本および集計結果

22 次のような意見をどう思いますか。

	とても そう思う	わりと そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
1. 最近、職場でゆとりを感じる事が少なくなった...41.0	43.5	14.0	1.6	
2. だんだん職場環境が悪くなっている.....31.3	40.3	25.3	3.1	
3. 全般的に、教師に対する管理が強くなっている.....33.0	36.2	28.1	2.7	
4. 管理職（校長や教頭）による指導や管理が 以前より多い.....24.5	31.8	39.6	4.1	
5. 職場の同僚と、飲んだり話したりする機会が 減っている.....22.0	46.1	28.4	3.5	
6. 教師も、以前より個人主義的な傾向が進んでいる...26.6	53.7	18.2	1.4	
7. 教師同士で、世代間の意思疎通がうまくいかない...12.8	41.3	42.9	3.0	
8. 学校現場が、以前より活気がなくなっている.....21.6	46.8	29.5	2.1	

23 現在勤務している学校の教育環境は、数年前に比べて変わってきましたか。

	とても そう思う	わりと そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
1. 保護者や地域に対して開かれてきた..... 3.5	43.1	49.3	4.2	
2. 成績処理にコンピュータ利用が進んだ.....50.8	44.6	4.0	0.5	
3. 校務分掌など学校での仕事が組織化された..... 7.9	34.2	52.6	5.3	
4. 職員会議での話し合いが活発となった..... 0.5	12.5	64.5	22.5	
5. 生徒の精神面をケアする配慮がなされた..... 3.9	44.7	43.0	8.4	
6. 教員の自主的研修の機会が増えた..... 0.1	6.8	68.0	25.1	
7. 教育委員会などの主催する研修会などへの 参加が増えた..... 1.8	16.2	64.5	17.5	
8. クラスや部活動で生徒指導に悩む機会が増えた.....15.6	47.3	33.2	3.9	

資料 調査票見本および集計結果

24 高校を取り巻く教育環境は、10年後くらいには今と比べてどのようになっていくとお考えですか。

	とても 増す	わりと 増す	どちらとも いえない	わりと 減る	とても 減る
1. 社会の中での高校卒の重み.....	4.6	8.1	35.9	34.1	17.4
2. 黒板中心の授業展開.....	0.3	2.1	41.5	48.9	7.3
3. 授業用プリントの量.....	4.3	38.3	40.7	15.0	1.7
4. 生徒の部活動の時間.....	0.5	10.8	37.2	43.8	7.8
5. 生徒の生徒会活動への参加度.....	0.1	4.5	33.8	47.7	13.9
6. クラスの生徒数.....	0.0	0.0	11.7	70.4	17.9
7. 保護者会の回数.....	0.8	19.2	59.9	17.5	2.6
8. 中学校と高校の連携.....	4.4	57.2	33.1	4.7	0.6
9. 高校と大学の連携.....	7.5	53.0	35.4	3.4	0.8
10. 地域住民への学校開放.....	6.4	59.9	30.6	2.7	0.4
11. 大学の入試競争.....	7.1	23.7	37.9	26.6	4.7
12. 生徒の進路選択の多様化.....	13.0	57.5	25.1	4.0	0.4
13. 学校現場に対する教育委員会の管理や指導.....	19.7	46.5	31.1	2.1	0.7
14. 職員会議の自主性.....	0.6	5.8	52.1	28.8	12.6
15. 塾・予備校など学校外機関との連携.....	8.2	47.9	41.0	2.2	0.8

差し支えなければ、勤務している学校名を教えてください。

() 高等学校

～ 以上で終わりです。長い間ありがとうございました。～